

城之内遺跡

長良高等学校体育館建設に伴う岐阜
大学跡地の緊急発掘調査報告書

1990

岐阜県教育委員会

序

岐阜市は岐阜県の南部に位置し、人口40余万人を有する県庁所在地です。このなかで、岐阜市北部地区は、最古の戸籍に名を残す三田洞地区・県内でも数少ない国宝のひとつを有する雄略護国寺・鏡等の出土品から畿内との関係が深い古墳群の存在など、歴史の重みを感じさせる旧跡等が多く残っています。

このたび岐阜県教育委員会では、岐阜大学教養部・教育学部の黒野地区への統合移転にともない、跡地への県立長良高等学校校地拡張・施設建設を計画いたしました。今回拡張の対象となった地域一帯は、以前より白鳳時代の瓦類が多く採集できることから「長良廃寺」という名称で知られ、その出土品中の人間の顔を模した人面瓦は全国的にも大変稀なものとして注目されています。こうした事情に鑑み、岐阜県教育委員会においては施設建設に先立ち発掘調査を実施することとなり、文化課が担当することとなりました。その結果、寺院跡の明瞭な遺構は発見できませんでしたが、弥生時代末期から古墳時代にかけての住居跡・大溝、中世の溝・井戸等の遺構、美濃国刻印入りの須恵器を初めとする各時代の大量の遺物が出土いたしました。この報告書の刊行にあたり、数多くの機関・個人の方々にご協力いただきました。特に、炎熱・極寒の折りにも、たゆまず作業いただきました作業員の皆様のお陰をもちまして今回の調査を行い得たことを深く感謝いたしまして、序文とさせていただきます。

平成元年3月

岐阜県教育委員会

文化課長 加藤 英夫

例 言

1. 本書は、岐阜県立長良高等学校屋内運動場建設工事にともない、岐阜県教育委員会指導部文化課文化財第二係が昭和63年度と平成元年度に実施した、城之内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は主として、岐阜県教育委員会指導部文化財第二係教育主事大熊厚志が担当し、昭和63年10月3日より平成元年7月31日まで、二箇年度にわたって実施した。
3. 出土遺物の整理・報告書の作成は、大熊が主として行い、文化課文化財第二係職員および調査補助員横井聡子・坂井浩・池田和江・成瀬正勝が補佐した。
4. 発掘調査・遺物整理・報告書作成にあたっては、三重大学人文学部八賀晋教授・信州大学人文学部大参義一教授・岐阜市教育委員会社会教育課・岐阜県立長良高等学校の諸氏・機関より多大なるご援助ご協力を頂いた。
5. 調査にあたっての組織は次の通りである。

調査員	大熊 厚志 (岐阜県教育委員会指導部文化課教育主事)
	町川 克己 (同上課長補佐)
	青木 久 (同上教育主事 現東濃高等学校教諭)
	宮崎 光雄 (同上学芸主事 現恵那市立大井小学校教頭)
	宇野 治幸 (同上学芸主事) 只腰正知 (同上課長補佐)
	佐野 康雄 (同上教育主事)
調査補助員	横井 聡子 坂井 浩 池田 和江 成瀬 正勝
事務局	加藤 英夫 (岐阜県教育委員会指導部文化課長)
	北条 統督 (同上総括課長補佐兼庶務係長)
	丸山幸太郎 (同上課長補佐兼文化財第二係長)
	長島 一明 (同上主査)
	南谷 繁彰 (同上主任 現健康院主任)
	山内 幸子 (同上主事 現長良高等学校主事)
	藤澤 昌利 (同上主事)
	中嶋 里美 (同上主事)

6. 城之内遺跡の発掘調査は、当初は三箇年度にわたって実施される予定であったが、諸般の事情により屋内運動場建設予定区域の調査をとりあえず実施し、その他の区域については平

成3年度以降に発掘調査を行うこととなった。そのため報告書作成については当初、全調査終了後を予定していたが、迅速な報告を考え、二箇年度分を切り離して報告書を作成した。そのため全体の考察等は全予定区域の終了後に結論を持ち越した。また遺物については、出来るだけ多くを収録することを第一とした。

7. 報告書に使用した図版等の縮尺は、遺物は3分の1、遺構は20分の1を原則とした。これ以外の縮尺を用いる場合はその旨を各ページに記した。
8. 註については、各節ごとにまとめ、番号は通番とした。
9. 調査で出土した遺物・実測図等はすべて岐阜県教育委員会文化課において保管している。
10. 遺物に付した番号は通番で、本文・遺物実測図・写真図版とも同一番号を付している。
11. 調査にあたっていただいた作業員・協力いただいた方々は下記のとおりです。

発掘調査作業員

玉木 勝・鈴木良治・向井 好・山田定一・馬田喜義・山本育子・丹羽 剛・宮部節男・足立 稔・臼井郷弘・河合 茂・松本友子・伊藤桂子・尾崎公一・松原保一・吉村新百・福田基二・鷺見善治・田中順次・玉井良二・神谷清市・辻 良一・池田和江・小川進次・佐竹 博・加藤幸夫・田保国男・高井 清・中嵩清司・辻田宣子 (順不同・敬称略)

ご協力いただいた方々

高木 洋・田中幸男・内堀信雄・堀 正人(岐阜市教育委員会社会教育課)
藤澤良祐(瀬戸市教育委員会)、山内伸浩(多治見市教育委員会社会教育課)、成瀬正勝(可児市立南帷子小学校)、藪下 浩・土山公仁(岐阜市歴史博物館)、中井正幸(大垣市教育委員会社会教育課)

目 次

序		
例 言		
第1章 「はじめに」	1
第1節 城之内遺跡周辺の歴史的環境		
第2章 「調査の概要」	5
第1節 調査の方法及び概要		
第2節 基本層序		
第3章 「遺構」	8
第1節 検出遺構の概要		
第2節 弥生時代～古墳時代の遺構		
第3節 中世の遺構		
第4章 「遺物」	15
第1節 土師器	15
第2節 須恵器	20
第3節 美濃国刻印須恵器	23
第4節 瓦 類	24
第5節 灰釉陶器	27
第6節 白瓷系陶器（山茶碗）	27
第7節 中近世陶器類	32
第8節 土師質土器（皿）	32
第9節 石鏝・土鏝	35
第10節 その他の出土遺物	37
第5章 「総括ならびに考察」	41
第1節 出土遺物の性格・年代等について		
1 弥生土器・土師器	41
2 須恵器	41
3 土師質土器（皿）	42
3 山茶碗	44
4 その他の出土遺物	44
第2節 考 察	45
図 版	48～

挿 図 目 次

- 図 1 周辺の遺跡分布
- 図 2 発掘区域位置図
- 図 3 大溝埋土断面図
- 図 4 溝埋土断面図
- 図 5 住居跡平面図
- 図 6 遺構分布図

写真図版目次

- a 発掘調査前全景（北西より）
- b 遺 構 検 出
- c 住居跡検出
- d 大溝完掘状況（東より）
- e 大溝完掘状況（西より）
- f SD01完掘状況（東より）
- g 遺物出土状況（同上）
- h SD01埋土堆積状況
- i 井戸跡検出
- j 井戸側たちわり
- k 井戸底完掘状況
- l SD02-SD03完掘状況
- m 器台出土状況
- n 土師皿出土状況
- o 大溝掘削状況
- 1~474 出土遺物

第1章 「はじめに」

第1節 発掘調査にいたる経過

城之内遺跡（岐阜県遺跡地図収載番号 G33S 0 3153）は岐阜市長良西後町地区に所在し、旧岐阜大学の敷地がほぼ遺跡の範囲と思われる。表面採集された遺物には弥生時代から中世に至る土器類・瓦類等があるが、特に、全国的にも類例の少ない人面瓦の採集により寺院跡が地下に埋没している可能性が指摘されていた（註1）。また中世においては、美濃国守護土岐氏の屋敷「枝広館」を当地に比定する考えもあり、何らかの遺構の存在が確実視されるものであった。

今回この地が発掘調査の対象となった契機は岐阜大学の黒野地区への統合移転であった。岐阜市長良地区にあった教育学部・教養部の黒野への統合移転計画により、跡地は岐阜県及び岐阜市に売却されることとなった。岐阜県では跡地に隣接する長良高校の校地拡張・施設建設を計画していたが、当該地が周知の遺跡であることから、岐阜県教育委員会学校施設課と文化課による協議が行われ、文化課による発掘調査が昭和63年度より実施されることとなった。また同様に、中学校建設のため跡地を購入した岐阜市は工事に先立って昭和61年度に発掘調査を実施したが、この調査では弥生時代から中世にかけての遺物が大量に出土している（註2）。特に、人面を瓦当面に配した、いわゆる人面瓦や、軒丸・軒平瓦等が数多く出土し、岐阜大学跡地に寺院址が存在したことがほぼ確実となった。ただこの調査では寺院の確実な遺構は検出されず、南に隣接する岐阜県有地での寺院址の存在の可能性が大きくなった。

- 註 1 八賀晋「第4章 第四節 歴史時代」『岐阜市史 史料編 考古・文化財』岐阜市 1979
- 註 2 岐阜市教育委員会社会教育課（現 文化課）のご好意により出土遺物を見聞させていただいた。また報告書執筆にあたって社会教育課の方々より数々のご教示をいただきました。記して謝す次第です。

第2節 城之内遺跡の歴史的環境

岐阜県の県都、岐阜市は濃尾平野の北部に位置し、長良川が市域を二分する形で北東から南西に流れている。今回発掘調査が行われた城之内遺跡は、扇状地様の地形の末端にあたる部分に位置している。長良地区で発見されている長良小学校遺跡・天神遺跡などもほぼ同様の立地条件と考えられている（註3）。

治水技術が発達していなかった時代において、少しでも高度のある岐阜市北部地域が長良川左岸（岐阜市南部）地域よりも早くから開けていたであろうことは想像に難くない。弥生時代の遺跡については岐阜市南部にもまとまった遺物の出土が見られるものの、美濃地方における初現期の古墳や畿内との強い関係を想起させる副葬品が出土した古墳の存在、また古代の官道であった東山道がこの地を通過していた可能性が強いことは、やはりこの地域の先進性を示すものであろう。

遺跡にほど近いところに存在するのが岐阜北古墳群である。この古墳群はいくつかの支群に分けられているが、城之内遺跡にもっとも近いものは長良支群と呼ばれている。この支群には三角縁神獸鏡が出土した龍門寺古墳（龍門寺1号古墳）がかつて存在していたが、墳丘の規模に比して副葬品の内容が卓越していることが注目されている。また同様の性格の古墳がそれほど距離を隔てずに存在していることも注意されてきた（註4）。今回調査した城之内遺跡は、この古墳群の被葬者の権力基盤となった地域におそらく含まれており、城之内遺跡に最初の生活を営んだ人々の数世代のちに龍門寺古墳の被葬者が現れたと考えると長良であろう。今回の調査を契機として、この地域では資料的にはやや空白の感もある、弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての時代像の解明に寄与するところがあれば、と思われる。

東山道に関しては、その関連遺物・遺構の検出が、長良庵寺に次いで期待された成果のひとつであった。この東山道の県内におけるルートおよび駅家の場所の比定については多くの論考が出されているが、長良地区に方県駅家が存在したとする説が有力である（異説もある）。城之内遺跡東方の雄総護国寺に関連する「金銅唐草文鉢」の伝承は、この雄総地区も含めた長良周辺が当時の国家権力の中心地たる奈良と何らかの強い結びつきがあったことを示すものであり、これは長良周辺を当時の官道が通過していた事の傍証となるものではなからうか。

註 3 大参義一 「第四章第一節 弥生文化の成立と展開」『岐阜市史 史料編 考古・文化財』 岐阜市 1979

註 4 榎崎彰一 「第五章第一節 岐阜市における古墳文化の成立」『岐阜市史 史料編 考古・文化財』 岐阜市 1979



図1 周辺の遺跡分布図

- | | |
|--------------|-----------|
| 1 城之内遺跡 | 2 長良小学校遺跡 |
| 3 長良龍門寺古墳群 | 4 護国之寺 |
| 5 織田信長居館跡伝承地 | 6 長良太田遺跡 |
| 7 長良天神遺跡 | |

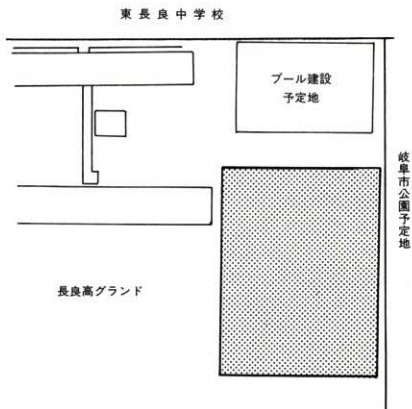


図2 発掘区域位置図（アミ目）

第2章 「調査の概要」

第1節 調査の概要

調査の対象となった地域は、中部未来博開催時に駐車場として供用されていたため、まず駐車場造成時の仮舗装土を昭和63（1988）年9月下旬より、機械により除去した。その後、磁北を基準として8m四方のグリッドを設定し、それぞれのグリッドの北・西に幅1mのアゼを設けることとした。南北ラインについては、南から1～8の東西ラインについては、西からA～Fの名称を付してグリッドナンバーとした。

調査は、土層の状況や遺構の遺存状態を探るため、ほぼ中央部を調査予定区域を横断する形で、掘り下げることから開始した。作業が進むにつれて、岐阜大学撤去時の埋土やコンクリート塊が予想以上に堆積していることが判明したため、急速重機を導入して表面から70～100cm程度の埋土およびコンクリート塊を除去した。その後は人力による掘り下げで遺構面の検出に努めた。その結果、明確な遺構はほとんど最下層上面に掘り込まれたものしかなく、遺物についても最下層にいたるまで、弥生時代から中・近世にまたがるものが混在していることが明らかとなった。

最初に検出した遺構は調査区域北端の中世の溝である。調査区域西半をほぼ東西方向に走り、東側部分で北へ向かって直角に折れている。同様の遺構の検出を以後の目標としたが、他の溝を検出することが出来たのは、この溝よりレベルにして30～40cmほど下がった、第II層の下部に近いところであった。

中央部から掘り下げを始め、西・北へ調査区域を拡大していったが、遺物は大量に、各時代のものが混在して出土した。遺構に伴うと考えられるものがほとんどなく、面的に遺跡の構造を捉えることが不可能であった。中世の土師質土器については、2箇所かなり集中して出土したが、ほとんど表土層に近い部分であり、後の再投棄であった可能性が高い。また、その他の集中的に出土した部分でも、須恵器と古墳時代の土師器が隣り合って検出されるなど、後世の土木工事の際に出土したものをまとめて捨てた可能性が非常に高い。また、近世以降の遺物がほとんど見られないことから考えて、その投棄は下限が中世後期と考えられる。ここまでの状況から、下部の遺構の存在は絶望的であったが、下層に調査を進めた結果、住居跡・ピット群・大溝を検出することが出来た。住居跡は、中央部分が重機により掘削されており遺存状態は良好ではなかった。埋土・床面（とおぼしき面）からは少量の土器細片が出土したのみであった。

大溝については、調査終了間際に検出することが出来た。当初、中世溝の南側部分を検出して
いたのであるが、これに切られる形で存在する掘り方を発見、精査したところ調査区域を東西
に横切る大溝であることを確認した。調査後半は梅雨にかかり排水等にかなり難渋したが平成
元年7月31日をもって現地作業を終了した。

第2節 基本層序

域之内遺跡の層序は、基本的には3層からなっている。このうち最下層は遺物が含まれてい
ない無遺物層であった。以下、それぞれの層について記す。

第I層（表土層）

岐阜大学解体撤収時の埋め土・未来博駐車場造成時の埋め土等からなる。50～70cmの厚さで
調査区域全体にあり、特に調査区域の南半部でやや厚くなっている。この周辺は大学建設以前
は畑地として利用され、北から南に緩く傾斜した地形であったようであり、層の状況と一致し
ている。この層からは、今回の発掘調査で出土と考えられる出土した遺物の、ほとんどの種類
が出ている。以前に表面採集された人面瓦もこの層からの出土と考えられる。出土遺物から考
えて白鳳～奈良時代・中世・岐阜大学造成時と、最低3回にわたり大規模な地形改変が行われ
たと思われる。

第II層（茶褐色粘質土層・茶褐色砂質土質）

弥生時代末期から近世にいたる時代の遺物が出土した層である。遺跡中央部を調査した段階
では、上部が砂質土層・下部が粘質土に分層しうる部分もあったが、下部からの出土遺物が上
部よりも必ずしも古くなく、再堆積によって生じた部分もかなりあると考えられる。出土遺物
については、近世の陶器類はごく少量であり、主体となるのは弥生～土師器・須恵器・山茶碗
（白瓷系陶器）・土師質土器が多い。各時代の遺物が混在している。出土遺物の時代の下限は
おおむね室町時代であり、この時期に第II層の最終的な形成が行われたと思われる。また、井
戸・溝の一部がこの層の下部から掘り込まれている。

第III層（黒褐色粘質土層）

住居跡・大溝・ピット群がこの層の上面から掘りこまれている。遺構からの出土遺物から、
この層の上面が弥生時代末期から古墳時代にかけての生活面と考えられる。70㎝～80㎝の厚さ

があるこの層内部からの遺物の出土はみられなかった。

IV層（明黄褐色土層）

遺物の出土は全く見られない。この層の下は、礫層となる。

第3章 「遺 構」

第1節 検出遺構の概要

検出した遺構は、住居跡1基・井戸1基・柱穴(?)様のピット群・土壇(?)1基・溝7条であった。遺溝の多くは調査区域の北半に存在したが、このことは調査区域の南側ほど地形の改変が大きかったのではないと思われる。城之内遺跡(長良庵寺)に関しては、岐阜大学テニスコート付近(遺跡南側の道路付近)に土壇状の高まりがあったとされているが(註5)、今回の調査の範囲内から類推する限り、その可能性は薄いように思われる。

Ⅲ層下部から掘り込まれていた溝の多くと井戸を除くと、すべてⅢ層上面から掘り込まれた遺構であった。これらの遺構は出土土器から、時間的には弥生時代末期から古墳時代初頭に属すると考えられる。ただこの時期の遺物はⅠ・Ⅱ層からも出土しており、古墳時代以後、Ⅲ層がある程度削平を受けたことが窺える。

井戸と溝については、その出土物から中世後期と考えられる。これらの遺構については掘り方のレベルがかなり異なっており、生活面として捉えることが不可能であった。

註 5 前掲註2に同じ

第2節 古墳時代の遺構

この時期に属すると考えられるものは、大溝(SD08)・住居跡(SB01)・ピット群(SX02)である。

SD08

調査区域の南を東西に横切る、幅1.5~1.8m、深さ1.2~1.5m、全長24mの大溝である。出土遺物は細片がほとんどであったが、土器器と思われる。

SB01

SB01は調査区北よりのD-7区で検出された。Ⅲ層上面より数cm上から掘り込んでおり、壁の立ち上がりは10~15cmである。1辺約3.5mの隅丸方形の平面形を呈する。中世の溝が遺溝中央部を南北に走り、さらに岐阜大学移転時の重機による掘削がなされているため、住居跡

中央部の状態は明らかではない。また、床面として捉えうるような硬化面も存在しなかった。埋土中から出土した遺物の時期から、古墳時代初頭と考えられる。なお、埋土についてはほとんど均質であり、特に分層はできなかった。柱穴と考えられるピットは径50～60cmの不整形円形を呈し、抜きとり穴とも考えられる掘り方もみられる。ピット中央部は深くっており、径15～20cmの木柱を据えたと考えられる。ピットの埋土中からも土器片が出土しているが、やはり細片である。

ピット群

ピット群は調査区北西部で検出された。ピットの深さが10cm前後のもの、非常に深いもの(30cm以上)の2種類がある。特に建物跡を想定できるようなものではないようである。

第3節 中世の遺構

中世(鎌倉時代～戦国時代)に属する遺溝は溝と井戸である。

SD01

調査区域北端を東西に横断し、東端は直角に折れて北へ続いている。東西に走る部分が長さ24m、幅1.1～1.2m、深さ0.5～0.8m、南北の部分は長さ5m、幅1.4～2m深さ0.4～0.5mである。南北方向の溝は薬研掘に近い断面形を呈する。東西方向の溝は長さ3.6mの空白部分が存在する。後世の攪乱による空白かとも考えられる。しかし西側は掘り方が完全に巡っており、もともとあいていたとも想定できるが、空白部分の東側は溝底の部分しか残っていない。入口等の施設も考えられるが、柱穴等は見られず構築物があった可能性は低い。

西側の溝の埋土中から動物形土製品(犬か?)が出土した。各時代の遺物が出土しているが下限は山茶碗である。溝の掘り方は3層上面より30～40cm高い。埋土の堆積状況から考えて、一度溝としての機能が廃絶してから再利用されたようである。この溝によって区画された北側は今回の調査対象外であり、推測の域を出ないが、建物跡の遺存も考えられる。

SD02、SD03

ともに深さ20cm幅25cmで、長さは、それぞれ3m、6.3mである。炭化物の混じるやや赤みを帯びた埋土で、SD02からはほぼ完形の荒肌手山茶碗()が出土した。溝自体が人工物であるかどうかは不明である。

SD04、SD05

調査区域を北東から南西に向かって走っている、平行した二条の溝である。古墳時代の溝・住居跡を切っている。南北の末端部分がやや不明瞭であるが、SD04は長さ38m、幅0.7～1.

0㍓、深さ0.8～1.0㍓、SD05は長さ41㍓幅0.6～1.6㍓深さ0.8㍓～1.0㍓である。ほぼ同様に蛇行しており、長さもそれほど違わない形状であるが、いかなる性格を持つものか、少なくとも出土遺物からは明らかにならなかった。防御用として考えると、幅・深さとも充分ではない。道の側溝とも考えられるが、溝と溝の間は硬化面等は見られず道路の付属施設と考えるには根拠が薄い。性格不明の溝である。

SD07

東西方向に走る溝で東側部分はSD04に接続した可能性もある。最下層の上面から掘り込んでおり、古墳時代初頭以前のもの可能性もあるが、埋土中に遺物が無く確定できない。ゴミ穴によりかなり攪乱されており全容は明らかでない。自然の溝の可能性もある。

井戸(SX01)

深さ4.5㍓、径1.1㍓で、井戸側は河原石を積上げ、水溜部分は板を巡らせて木の皮で巻いて桶としている。また水溜の周囲はごく細い木で形ばかりの枠を作っている。当初は人力で埋土を排除していたが、深くなって安全上問題となったため重機で半分にたちわり、掘り下げを行った。井戸側については崩壊が著しく、実測を行えなかった。井戸桶と木の枠については取り上げることができた。井戸桶は長さ70cm前後に切った板材を用いている。埋土中からは常滑焼大甕片・山茶碗片等が、また水溜部分からは天目茶碗(184)がほぼ完全な形で出土した。

この種の、井壁が石組で円筒形をなす井戸は、全国的には中世後期(15～16世紀中頃)に多くみられるとされている(註6)

註 6 字野隆夫「井戸考」『史林』65-5 1982 なお、この論考によれば本遺跡出土の井戸は「CI類石組円筒形井戸」となる。

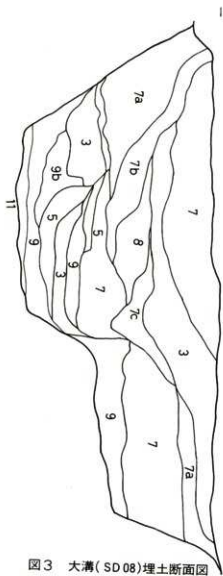


图3 大溝(SD 08)埋土断面图

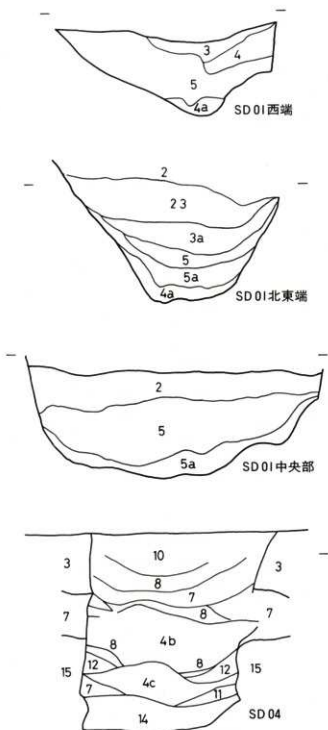


图4 溝埋土断面图

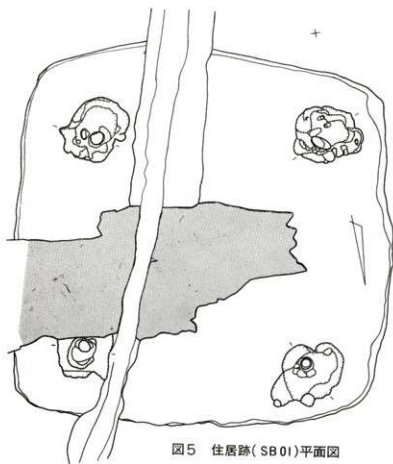


图5 住居跡(SB01)平面图

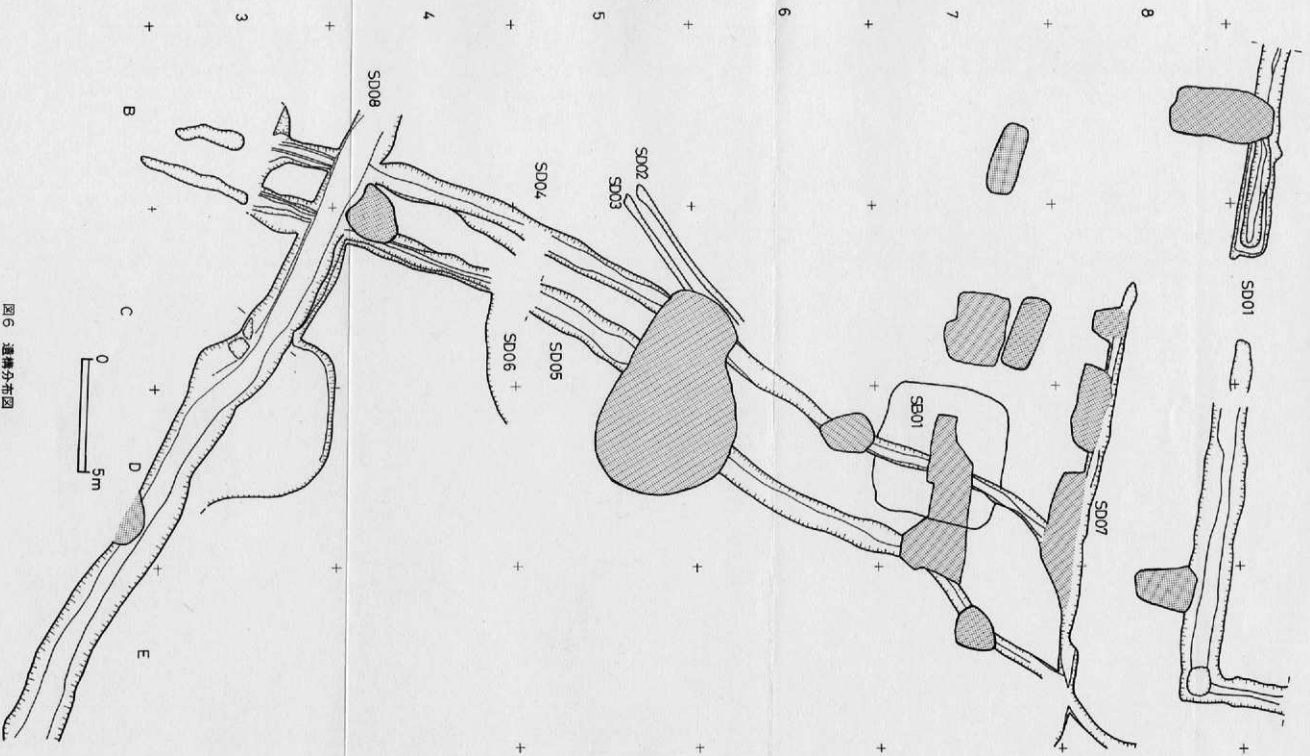


图6 遺構分布図

第4章 「遺物」

第1節 土師器 (1~45)

S字状口縁台付甕 (1~19)、高杯 (20~28)、パレススタイル壺 (29)、器台 (30~32)、甕 (33~37)、小形壺 (38~41)、蓋 (42)、甌 (43)、瓢形壺 (44)、鉢 (45) の器種が出土した。

1 S字状口縁台付甕

ほぼ完全に復元し得たものが2個体あり、その他に脚部ないしは口縁部を欠失したものは4個体を復元できた。1は、口縁部の一部が無いものの、ほぼ完形に復元し得たものである。胴部最大径は器高の半ばよりやや上で、肩の張った器形となっている。肩部に5~6条の刷毛目が巡る。胴部には斜め方向には知る刷毛目が三段につけられている。施文の順は、最下段→中段→上段→横方向である。肩より下の胴部は黒褐色で脚部は赤みを帯びた茶褐色となっている。脚部内面は胴部と接する部分に指による押圧痕が残る。端部は内へむかって折り曲げられており、その上を横にナデている。2は全体に赤味を帯びたうすい肌色を呈し、胴部下半および脚部が黒褐色となっている。1よりも胴部が最大径を計る部分が下に降りている。胴部には斜め方向の三段の刷毛目が、また肩部には横方向の刷毛目をつけられる。中段→上段→横方向の順で施文されている。脚部の接合・脚端部の折り返しは1と同じである。3・4・5・6は脚部が欠失した台付甕である。3は、全体に黒褐色を呈する。胴部には三段の斜め方向の刷毛目が入る。横方向の刷毛目は見られない。中段の斜め方向の刷毛目は長くほとんど脚部まで達する。下段→中段、中段→上段の順で施文される。(上段と下段の順は不明)。胴部はあまり強く張らず、胴部の中間が最大径をなす。4は白っぽい色調で胴部は部分的に煤けている。口縁部はあまり外反せず、上へ立ち上がっている。胴部は三段の斜め方向の刷毛目がつき、下段→中段→上段の順番で施文される。横方向の刷毛目は頸部に、やや雑につけられている。5も口縁部はあまり外反しない。横方向の刷毛目は頸部から肩部にかけて10~12条の広さでつけられ、口縁部付近では口縁の横ナデと区別がつけ難い。胴部が部分的に煤けているが、黄土色を呈する。6は地色がうすい茶色を帯びた灰白色を呈し、胴部下半は黒く煤ける。ただ、脚部に近い下半部は、ドーナツ状に赤化した部分のみられる。胴部のほぼ半ばで最大径をなすようで

あり、肩部の張り出しは緩やかである。胴部は刷毛目は斜め方向のものが三段と、肩部に横方向のものがつく。最下段→中段→上段→横方向の順で、上からみて時計回りに施文されている。内面は胴部の口縁近くに円周状に指の圧痕が残る。7は口縁部のない個体であるが、形状から考えて、口縁部がS字状でない可能性もある。胴部は水平面での断面形が楕円形を呈し、他のものがほぼ正円形であるのと異なっている。また胴部の刷毛目は一本一本が非常に太く刷毛目よりもむしろ沈線と呼んでも良いものである。刷毛目は四段ついている。中段→上段の順に施文されていることや、上段→中・下段の刷毛目の方向がやや異なる点などは他のS字状口縁台付壺と同じである。脚部は折り返して厚く肥厚させその上をナデている。脚部内面は円錐状となって胴部と接合する。全体に茶褐色を呈し、部分的に黒く煤ける。8～19は口縁部のみの遺存例である。8はうすく赤味があった茶色を呈し、S字状口縁のもの内ではやや異なる色調である。口縁部は丁寧な横ナデがなされており、胴部との接合部は沈線状にくぼませて胴部と区画している。胴部には斜め方向の二段の刷毛目がみられるが、横方向のものはつかない。上段の刷毛目は一本一本の溝がきわめて細く、施文の仕方自体も非常に丁寧であるのに比べ、中段（おそらく三段になると思われる。）はやや粗い。中段→上段の順で、上からみて時計回りにつけられている。肩部が衰えず、胴部はラグビーボール状を呈すると思われる。9は褐色を呈し、8と同様に焼成も良好な口縁部片である。口縁と胴の境は沈線状にナデられ、明瞭な刷毛目がつく。10は口縁部が屈曲するものの、あまり外反せずに立ち上がるものである。

2 高 坏 (20～28)

20は大型品の唯一の遺存例である。坏部は粘土紐の接合の痕跡と考えられる凹凸が表面に輪状に見られる。口縁部へ向かってごくゆるくカーブし、やや丸まって端部に至る器形である。縦方向のヘラミガキの痕跡が残る。脚部は裾にあたる部分が遺存しない。いったん内へ向かってくびれるが、裾へ下がるにつれて外反し、丸みをおびて端部へ収束する器形と考えられる。スカシ窓は間隔が均一でない。脚部にも縦方向のヘラミガキがみられる。21は上半分が外へ開いて段状になった坏部と、裾部へむかって直線状に開き、端部をさらに外へ大きく張りださせた脚部からなる。赤味をおびた茶色の色調を呈し、燈赤色や黄色に近い色調の他の高坏片とやや異なる。坏部内面は横方向の細かいヘラケズリがまた脚部内面には指による押圧や横ナデ痕（裾部付近）がみられる。スカシ窓は3つの間隔が均等に開けられている。22は外形は似ているが細部で異なっている。坏部は底がかなり浅く、アゲゾコ状になっている。脚部内面は坏部との接合部分近くまでは、中空にならず、円柱状の粘土塊となっており、その下に傘状に裾部を接合している。円柱状の部分は

粗い縦のヘラミガキが施されている。燈赤色を呈し、砂粒を胎土中に多く含んでいる。23、24は脚部のみの遺存例である。23は、スカシ窓が他に比して大きく4つあるが、4つのスカシ窓を確認できるのはこの一例のみである。また外面の坏部との接合部に近い部分には縦方向のヘラミガキの痕跡が見える。24は2段になったスカシ窓の、これも唯一の遺存例である。あまり大きく外へは開かず脚部全体が高く立ち上がった器形である。スカシ窓は均等な間隔で3つが二段に付けられている。内面は、やや雑なヘラミガキの痕跡が残る。25は坏部のみ良好な遺存例である。やや内湾しつつ外へひろく器形で、外面は粘土の接合部を沈線状にくぼませて段を作っている。脚部は、幅が太いが丁寧なヘラミガキの痕跡が残る。やや茶色をおびた黄色で、他とやや異なる色調である。26も脚部のみ遺存例である。坏部との接合部から端部にいたるまで、縦方向の細かく丁寧なヘラミガキが残る。スカシ窓は3つで、間隔は均一である。出土した高坏の脚部で、これも唯一の遺存例である。スカシ窓は4つで、間隔は均一ではない。穴がきれいに通っていないものも2つある。脚部全体に縦方向の粗いヘラミガキがなされ、端部はヘラで雑に面取りされている。内面はごくおおまかにヘラケズリの跡がみられる。全体として作りが雑で、子供が作ったかのようなものである。やや黄色を帯びた白色で、部分的に赤味を帯びる。28は坏部のみ遺存例である。内面底部の平坦面がなくすり鉢状になっており、口縁状は凹線状にくぼんでいる。外面は斜め方向の細かいヘラミガキがなされている。

3 バレススタイル壺(29)

胴部の一部を欠くが、ほぼ完形に復元し得たものである。胴部最大径がかなり低い部分となった、下ぶくれの形状である。底部は中空になっている。口縁部外面は縦凹線と赤彩を施している。口縁内面は、文様をつけた面がやや内湾し三列の刺突文が入る。中心に近い2列はナデ調整の後施文されているが、いちばん外側のものは施文された後に横ナデを行なっている。口縁部内面下半にも赤彩を施している。胴部には摺描文帯を三条と、その間に山形の直線文を刻み、その直線文の上を赤彩している。文様の付け方自体はかなり雑で山形文が上下の文様体に食い込んでいたり、赤彩が山形文の上を忠実になぞっていない部分が目につく。胴部下半は全面赤彩されている。胴部全体に施文前のかすかな刷毛目の痕跡が残る。胎土はきわめて細かく、砂粒は含んでいない。内面は部分的な器表の剝落がいちじるしい。胴部下半の欠失している部分については、故意に打ち欠いた可能性も考えられる。この種の土器の文類によれば、E類(新)にあたるものである。(註7)。

4 器台 (30~32)

30と31は互いの坏部と脚部を交差させて横にした状態で出土している。30は脚部部の径に比べて坏口縁部の径が小さく、脚はラッパ状に外反する器形となっている。スカシ窓は3つである。31はスカシの間隔が均一でない。坏部端部や脚部部は丁寧なヘラミガキがみられる。坏部内面は器表の剝落がいちじるしい。どちらも胎土中に砂粒を多く含む。32はやや形状が異なる。坏部は段がついて屈曲し、端部が外反する。脚部は裾部の外へのひらきがそれ程大きくなく、坏部との接合部付近は円柱状になって坏部にいたる。全体の作りがやや雑になっている。スカシ窓は3つで間隔は均一でない。

5 甕 (33~37)

器形をある程度復元しうるものは3個体である。33は、粗い縦方向の刷毛目を胴部全体に施文し、頸部と胴部は一条の沈線で区切られている。口縁内面には横方向の刷毛目がつけられ、その上を横にナデている。底部から胴部にかけての外面に部分的に赤化しており、火にかける等使用に供されたかと思われる。34は長胴の甕である。胴部は斜め方向に深く、口縁内面は横方向に刷毛目がつけられる。器壁は非常に薄くなっており、残存片から復元できる口縁部径 cm と、他に比して大型である。35は丸底甕とも言うべきものである。胴部の刷毛目は下半部に、おおむね二段につけられている。頸部と胴部は沈線状にくぼんで区画されている。褐色を呈するが、部分的に赤化している。胴部内面には指の押圧による凹凸の上に刷毛目の痕跡が残る。36、37は「く」の字状の口縁部をもつ甕片である。36は胴部に少なくとも二段の刷毛目がみられ、上段→中段の順で、上から見て反時計回りにつけられている。口縁部外面は横ナデされ、口縁部内面は横ナデ以前の斜め方向の刷毛目の痕跡が残る。外面は褐色、内面はうすい茶色を帯びた灰白色である。37は、36に比べて非常に堅く焼きしまっている。外面は、斜め方向のやや雑な刷毛目調整がなされてる。肩部付近は刷毛目の方向が不規則になっている。胴部内面は強い横ナデが全体に行われている。口唇部は面取りは行っていない。赤味を帯びた灰白色で、外面は部分的に黒く煤けている。

6 小型丸底甕 (38~41)

38は厚手の丸底甕で、口縁部の一部のみ欠失している。口縁内面はやや粗い横方向の刷毛目が残る。体部外面は板状の施文具でナデている。39は口縁部がまっすぐ開かずやや内湾する器形である。口縁部は内外面とも横方向の刷毛目が残る。40は白っぽい胎土の小形甕で刷毛目の痕跡が部分的に残り、全体に調整の痕跡をナデ消したようになってい

る。完形品である。4 1 は茶褐色を呈し、内外面に指の押圧痕が明瞭に残る。

7 蓋 (4 2)

口縁部の三分の一程度が欠失するがつまみの部分が遺存し、蓋であることが推定できる個体である。燈赤色を呈し、厚手のつくりである。表面はヘラミガキにより、平滑にされている。

8 甌 (4 3)

口縁部の一部が欠失するが、遺存状態は良い。底部に径 1、2 cm の穴を下から穿孔している。外面は底部付近が縦方向の、胴部が斜め方向の、口縁部付近は横方向の刷毛目が右回りにつけられている。内面は上半部に横方向の刷毛目がみられる。口縁直下を指で押さえて窪ませて口唇部を作り出している。

9 瓢形壺 (4 4)

一個体を復元することができた。口縁部と胴部の一部が欠失するが、胴部は穿孔された可能性もある。また胴部下半が部分的に剥落しているが、これも故意に削られた可能性を否定できない。最大径は胴部の半ばよりやや下で、下ぶくれの器形である。口縁部はまっすぐ外へ開かず、いったん膨らんだのち丸く収束する。胴部内面には横方向の刷毛目が残る。外面は部分的にヘラミガキの痕跡がみえる。底部は平坦でなく、ごくわずかであるが中空となっている。淡い燈赤色を呈する。

10 鉢 (4 5)

確認し得たのは 1 点のみである。胴部はゆるく内湾し、端部で丸くおさまる。口唇部は特に調整していない。内面は軽く横ナデされている。高台は円柱状の粘土をつけており、高台周囲を指で強く押圧している。高台底は中空となっている。ややくすんだ燈赤色を呈する。胎土中にはほとんど砂粒はみられない。

註 7 北村和広「パレススタイル」『欠山式土器とその前後』第 3 回東海埋蔵文化財研究会 1986

第2節 須恵器 (46~81)

今回の調査で出土した須恵器は時期的には7世紀代から8世紀代のものが中心である。量的に多いのは7世紀末から8世紀初頭にかけての、無台・有台の坏身が多い。器種としては、坏蓋(46~55)、坏身(56~71)、高坏(72~73)、横瓶(74)、甕(75~76)、甕(77~78)、矩形壺(79)、盤(80)、蓋(81)の各器種を確認することが出来た。

1 坏蓋(46~55)

46は、天井部に不定方向のヘラゲズリが施され、天井部と体部の境となる部分は沈線状にナデられ明瞭な稜が形成されていない。胴部最大径は口縁部よりやや上部になっており胴の張った器形となっている。明るい灰褐色を呈する。47は天井部外面は雑な調整が施され粘土紐巻き上げの痕跡がかなり明瞭に残っている。体部の張りはゆるく、天井部と胴部の境はなく、ゆるやかな曲線で端部に移行している。また口縁内部はやや肥厚して形成されている。褐色を呈し、焼成は堅緻である。48は、天井部の平坦面が狭い器形で47よりも扁平な器形となっている。天井部には回転ヘラゲズリが施され作りが丁寧になっている。灰褐色を呈しほぼ完形品である。49~51は小型の坏身とセットになるものであろう。4は焼け歪みが若干あるものの完形品で灰白色を呈し外面に自然釉が付着している。断面菱形の宝珠様のつまみをつけている。50は全面に自然釉が付着し、高坏(?)の重ね焼きの痕跡がみられる。蓋内面のカエリは49に比べて内傾し、かつ大きくなっている。51は49と口径が若干異なるものの、カエリの小ささ・扁平な器形などから同一規格で制作されたかと思われる。天井部中心より1/2前後まで回転ヘラゲズリの痕跡が見られる。52~55はいずれも擬宝珠様のつまみを有し口縁部をやや屈曲させた器形である。52は灰白色を呈し、やや胴部のはった器形となっている。53は52に比べ端部のつくりがよりシャープとなっているが、器形は52とほぼ同じである。54はつまみが低く潰れ、器高は低く、径が大きくなっている。灰褐色を呈し、焼成は良い。52、53とも天井部より1/2前後まで、回転ヘラゲズリが施されているが、54は端部に近いところまで削られている。55は小ぶりの蓋であるが、器高が高くなっているのが他と異なる。

2 坏身(56~71)

蓋受け、立ち上がり有するもの(56~60)と、それ以外の無台・有台坏身(61~71)に分けることが出来る。56は、立ち上がりが短く内傾し、蓋受けの部分から段

をなして上がっている。底部外面はは1/2程度ヘラケズリがなされているが、丸く安定性に欠ける。57はきわめて焼成が良く、底部外面は1/3ほどに丁寧なヘラケズリが施されている。立ち上がりは小さく内傾している。内面灰白色、外面灰褐色を呈する。58は完形品である。底部外面1/2ヘラケズリが施され、いわゆるゲタ状圧痕が残る。ヘラケズリは部分的に端部近くまで及んでいる。立ち上りの段は殆どなくなって上へ伸びている。内面は1/2程度回転ナデが施されている。青白色を呈し焼成は堅緻である。59は扁平な器形であるが、立ち上がりがいったん内傾しながらやや開いている。蓋受けは立ち上りに比して小さく丸い。外面は回転ヘラケズリののちさらに丁寧なヘラケズリが施されている。青味かかった灰白色を呈し、焼成は良い。底部は丸く、すわりが悪い。60はさらに扁平になったもので、底部外面のヘラケズリは中心より2/3程度まで行っている。立ち上がりは小さく申し訳程度になり、蓋受けとの境もはっきりしない。

無台の坏身(61~64)は、底部が径に比べてかなり小さく外へ向かって開く器形のもの、そうでないものの二種類がある。61は、外面底部に丁寧なヘラケズリが施される。腰部は若干ふくらみつつ、ゆるやかに内湾して口縁部にいたるもので、口縁部内面はゆるやかな段をつくっている。内面は回転ナデが施されている。青灰白色を呈する。62も同様の器形であるが、外面底部がやや丸く、口縁内面も肥厚していない。青灰白色を呈する。63は腰部が膨らまず直線的に立ち上がる器形である。底部外面は回転ヘラケズリが施され平坦になっている。64は底部外面に粘土紐の痕跡が残り、63に比べやや外へ開いた器形となっている。いずれも明灰白色を呈し焼成も良い。

有台の坏身は、底部から直線的に口縁端部にいたるもの(65~71)の他に、ハの字状に大きく開く器形のものがある。65は有台坏身中、最も大きなもので、体部は直線的に立ち上がる器形で、高台の接地面は平らである。底部は中心部分が下に垂れ下がっている。やや黄味がかった灰白色を呈する。66は底部と体部の境が明瞭に作り出されており高台の接地面は内端面となっている。青味がかった褐色を呈する67は明灰白色の色調から各務原市稲田山古窯跡群からの招来品と思われる。径に比して器高が高く、体部は丸みを帯びた器形となっている。高台のつくりは65、66に比して雑で、端部の稜はみられない。68は67にちかい形状であるが、底部と体部の稜が作り出された丁寧な造作で高台は台形状を呈している。灰白色を呈する。69、70は底部内面と体部内面の境がはっきりしたもので底部は平らを意識して作っている。他の有台坏身に比して高台の貼り付け位置がやや内側にはいつている。高台断面は台形状である。69、70とも灰白色を呈し焼成は堅緻である。71は腰部が屈曲して、外反する口縁部にいたる器形のもので、口縁端部は内面にケズリ残しのような段差が出来ている。青味がかった灰白色を呈し、焼成も

良い。

3 高坏 (72~73)

ある程度器形をうかがい知ることのできるものは、72のみである。脚部は基部が太く端部はいったん下方に屈曲させて段を作っている。坏部は口縁部にむかって緩やかな曲線で移行している。灰白色を呈する。73は一部に自然釉がかかり、焼成は堅緻である。72とはほぼ同じ器形を呈するものと思われる。

4 横瓶 (74)

横瓶であることが確実な破片は、74の口縁部破片1点のみである。頸部に明緑色の自然釉が付着している。灰白色を呈し、焼成は堅緻である。外面にタタキ痕が、内面には同心円状のオサエ工具の痕跡が残る。口縁部には円形浮文がつく。

5 はそう (75~76)

頸部は欠失し、体部の出土例のみ認められる。75は体部の最大径が、その高さの上部1/3程度に求められる。最大径をなす部分に一条の沈線をめぐらし、沈線間をナナメにヘラで文様をつけている。底部より1/2程度まで回転ヘラケズリがなされ、底部と体部の境が明瞭である。底部は丸く、葉脈状のヘラ記号が描かれている。黒褐色を呈し、焼成は堅緻である。76は体部最大径は上部より1/2程度に下がっている。二条の沈線を巡らし、外から内へむかって穿孔している。内面は無調整の段積みである。灰白色を呈し、焼成は良い。

6 硯 (77~78)

二点出土している。77は陸の周縁に幅の狭い海を設けた円面圓脚硯(いわゆる透脚硯)である。底部端は面取りがなされ、その上に二条の沈線が巡っている。スカンは、外から中に向かって開けられており、復元すると9つになる。78は円面堤瓶形硯である。深い鉢の天井部を平坦にしたような形態のもので、把手は欠失している。陸にあたる部分は摩滅しており実際に使用されたことがうかがえる。把手の接合部分には外から内にむかって穴が開けられており、把手が中空であった可能性も考えられる。底部は下部から1/2程度まで回転ヘラケズリがなされ、体部上半には段が出来ている。坏身等と同様な工程で形成し、天井部を円盤状の粘土でふさいだと思われる。

7 短頸壺 (79)

口縁部を有する破片が一点、79のみ出土している。肩部が沈線状ナデられており、内面には丁寧な回転ナデが施されている。

8 盤 (80)

脚の部分が一点のみ出土している。

9 蓋 (81)

一点出土している。色調から稲田山古窯跡群からの招来品と思われる。

第3節 美濃国刻印須恵器 (82～85)

今回の発掘調査では4点の出土をみた。出土遺物については一部整理途中であるため、この点数はさらに増加する可能性が高い。いずれも無台坏身の底部内面に施印されている。美濃国刻印須恵器を焼成した老洞1号窯の発掘調査報告書の分類に従えば(註8)、「押印された器表の字面が凹む」A類が3点(82～84)、「凹印を用い字面が突出する」B類が1点(85)である。更に印字については、1点のみ「美濃」の下に「クニガマエ」様の印影があり(83)、本来「美濃国」であった可能性も考えられるが、他はすべて「美濃」が施印されたA類である。報告書の分類に従えば、A-I-1(またはA-II-2の可能性もあり)が1点(83)、B-II-2類が1点(85)となる。

本遺跡のような他地域からの出土例は、81年3月の報告時においては26遺跡から37点の出土が報じられている。その後の出土例と今回分を加えると、29遺跡から少なくとも44点の出土となる。(註9) 前回報告時に比べると、出土の東限が、岐阜県美濃加茂市から、神坂峠をこえた長野県飯田市へと拡大している。飯田市の出土遺跡は郡衙の比定地であり、東山道との関連が想定できる。なお、他地域出土例は殆どがA類であり、B類刻印は1点しか出土していない(註10)。2点目の資料が本遺跡から出土していることは注意すべきではなかろうか。他地域出土例自体がそれほど多くなく、今後の資料の増加を待たねばならないが、このB類刻印須恵器は焼成された老洞窯でも占める割合は小さく(1292点のうち47点)、使用に際しての刻印規制が、老洞の報告書でも述べられているように、あるいは存在したのかもしれない。

註 8 高木洋「第V章4 美濃国刻印須恵器」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜

阜市教育委員会 1981 分類等すべてこの報告書にしたがった。

註 9 81年報告に次の例が付け加えられる。

城之内遺跡(岐阜市長良) 県・市両方の発掘調査で出土している

檀之木洞遺跡(関市) 関市教育委員会発掘調査

恒河遺跡(長野県飯田市) 飯田市教育委員会発掘調査

この他に関西地方での出土例があることのご教示を受けたが、確認しえなかった。

註 10 註8に同じ

第4節 瓦類(86~115)

平瓦(86~108)・丸瓦(109~115)あわせて30点の出土を確認したが、軒平瓦・軒丸瓦・道具瓦等は1点も検出することができなかった。昭和61年度の岐阜市教育委員会調査時に出土した人面瓦や、寺院跡の遺構の検出が期待された今回の調査であったが、遺物の面からも明らかにすることはできなかった。瓦類については、面積的に半分以下であった岐阜市の発掘調査において1万数1千点出土しているのに比べると、大変貧弱とも言える様相を呈している。今回の少量の出土のほとんどが、調査区の北半部からのものであり、寺院に関係する遺構があったとすれば長良高校と東長良中学校にまたがる部分とも考えられる。

1 平瓦(86~108)

86は、今回の調査で出土した瓦片のなかで最も大きなものである。灰白色を呈し、胎土は緻密で焼成も極めて良い。他の平瓦片も焼成の良好なものが多く、この点でも岐阜市調査時の出土瓦の多くと様相を異にしている。一側面と小口面が残っており、凸面には、少なくとも3回の叩きながされている。凸面の小口面はヘラ状工具で面取りされ、小口面には糸切りの痕跡が見える。凹面には楔骨痕・布目痕・布の合わせ目痕および桶巻き作りによる平瓦円筒を分割した後についた木片(?)の痕跡も見られる。また、断面には桶に粘土板を巻き付けた際の粘土板の合わせ目がみられる。これらのことから、この平瓦は、桶巻き作りにより成形された後、凸型の成形台の上に置かれ、小口の面取りが行われたと考えられる(側面についてはこの瓦片に関する限り二次調整の痕跡が見られない)。87は、器厚が1.9cmから2.0cmと、86に比べてやや薄いのが、同様に硬質な平瓦片である。側面の一部が遺存しているが、凸面と側面の角をヘラで削り取っている。叩き目は86より粗い原体がまず使用され、その上に目の細かい原体で部分的に叩かれている。凹面には布

目痕・模骨痕が残る。86と同じように、桶巻き作りの後、凸型の成形台で二次調整が施されている。88はSD01の埋土の上部から出土した。小口面と凸面に接する角はヘラケズリがされている。小口面には糸切り痕が残る。凹面には、桶についていた突起と思われるものの痕跡が残る。明灰白色を呈し焼成も良い。89は、器壁が1.2cmから1.3cmと薄いものの、色調・焼成は88と同様である。側面の面取りは86～88ほど大きくなく申し訳程度のもとなっている。凹面の布目痕の上に別の圧痕が見える。90は凸面の叩きが平行叩き目となっており、目の粗い原体による叩きの上に、小さな原体の叩きが施されている。凹面には89と同様に布目痕の上に凸型台の痕跡らしきものがある。86～89に比べると断面の形状がそれほど弧状をなしていない。SD07の埋土中から出土した。91は凸面の小口面に沿った部分の叩き目がナデ消されており、ヘラケズリは施されていない。凹面には布目痕の上に凸型台の端部の痕跡と思われる部分が残っている。平瓦円筒を分割して凸型台の上に置いた際に小口面と台の側縁がズレて出来たものと思われる。明灰白色を呈し、焼成も良好である。92はSD04の埋土中から出土したもので、凸面には叩きの格子目がやや細く中が大きい格子目叩きが、凹面には布面痕が残る。凹凸両面とも自然釉(?)が発色している。93は凸面の調整をナデ消しており、叩き目がそのまま残る86～92と異なる。凹面も布目痕をナデ消している。灰白色を呈し、焼成は今までのものと同様に良好である。94～108は、86～93に比べ焼きが悪く、白っぽい色調を呈するものが多い。また軟らかいために、器壁が剝落したり、磨耗したりして調整が明らかでないものもある。94はこれらの軟質の平瓦のなかでは最も大きなものである。凸面は格子目叩きの後、ナデが施され、凹面模骨痕・布目痕・凸型台の痕跡(?)がみえる。遺存している部分で考えるかぎり、硬質の平瓦に見られるような面取りは行われていない。95は小口ないしは側面の一部が遺存している例である。凸面の端部の叩きがナデ消されているが、特に角の面取りが行われた痕跡はない。凹面には布目痕が残る。やや茶色を帯びた白色を呈する。96は側面が遺存するが、側面に沿って施されている叩き目のナデ消しは器表をなぞった程度であり、叩きの痕跡が残っている。ヘラケズリは見られない。凹面には布目痕の上に木目状の痕跡や段が生じている。凸型台の上に置いた際に出来たのであろうか。凹凸両面とも白く、内面は褐色を呈し焼きが悪い。97、98は凸面がナデ消され、叩き目等は全く見られない。凹面は布目の上をナデている。99は、色調・焼成は同様であるが、矢羽根状の叩きが凸面に施されている。この種の叩きはこの一点しか発見していない。叩きの上をナデているが、原体の凹凸が大きいためかなり明瞭に叩きが認められる。凹面は布目の上をナデている。100は凸面にかなり大きい格子目叩きがまた凹面には放射状の圧痕が布目をナデ消した後つけられている。黄味を帯びた灰白色を

呈する。101は凸面に縄叩きがなされた後にナデられており、99とともに異種の叩き目である。102は側面・小口面とも遺存する唯一の例である。角はヘラケズリではなくナデで成形しており、凹面端部は側面に沿って布目の上をナデている。凸面はナデられて、ナデ以前の調整不明である。黄味を帯びた灰白色を呈する。103は凸面がナデ調整された細片であるが、凹面の剝落部分に叩き目が残っている。いったん平瓦凸面として調整されたものが何らかの理由で上に新たに粘土をはったとも考えられるが叩きの格子が非常に小さく、また他に類例が無いため、即断が出来ない。104は側面が一部のこる平瓦片である。凸面全体がナデられて叩き目が消されている。ナデ以外の側面の調整はみられない。105～108は凸面の叩き目がはっきり残っている。105は側面の一部が残る。軟質の平瓦のなかでは焼きが良い。やや茶色がかった灰色を呈する。106は褐色を呈し、焼きが悪い。107は凸面のみが剝落したものである。特別な側面の加工は見られない。108は凹面に模骨痕・布目痕が残り、ナデ調整が施されている。表面は白色を、内面は褐色を呈する。

2 丸瓦 (109～115)

丸瓦と判明したものは9点を数えるのみである。いずれも、焼きがあまく、灰白色を呈し器壁の厚いものが5点、明灰褐色を呈し焼成も良好で、器壁がうすいものが4点ある。玉縁を有する破片は一点もない。図示したのは6点である。

109は凸面の器表に段差があり、素材が粘土紐であったことがうかがえる。また凸面には縄叩きの痕跡が残る。凹面には布目痕・布の合わせ目痕が残る。側面はヘラケズリがなされている。これらのことから、この丸瓦は、布をかぶせた円柱状の型に粘土紐を巻きつけて成形・分割した後、側面のヘラケズリ調整を行ったものと考えられる。(小口面については出土遺物中に小口面を有する破片が存在しないため明らかでない)。110も同様の製作工程を経たものと思われ、断面に粘土紐の接合痕が見られる。109・110とも凸面は丁寧になデられ、叩きの痕跡は見られない。111は、109・110と異なり、やや硬質の丸瓦片である。断面に粘土板の合わせ目痕が残っていることから、109・110のような粘土紐ではなく、粘土板を円柱状の型に貼り付けて成形したと考えられる。凸面には布目痕が凹面にはヘラケズリの痕跡が残る。112～114は111と同様に硬質な丸瓦片である。112は凸面はきれいにナデられている。凹面は布目痕を、土器の刷毛目調整のような工具でナデている。113もおなじような調整が施されている。114は111～113に比べやや明るい色調を呈する。凸面は112・113の凹面調整のような原体でナデられている。凹面は布目の上に指によるナデ痕が残る。側面はヘラケズリ

が施されている。115～117は、109～111と同じやや軟質な丸瓦である。凹凸両面ともナデられ、布目痕・叩き目等は見られない。7は粘土板合わせ目の痕跡がみられる。

第5節 灰釉陶器（116～123）

復元し得たものは、碗3点・小碗1点・皿3点・段皿1点・耳皿1点である。一部のものを除いて、美濃産と思われる。116は、胎土・色調が他の灰釉陶器と異なっており、猿投山西南麓古窯跡群の産かと思われる。底部外面はヘラケズリが丁寧に施されており、内面にハケ塗りによる釉がかかる。腰部が張りだし、ゆるく内湾しつつ口縁直下で外反する器形である。117は、底部外面の糸切り痕が消されず残り、漬けがけによる釉が口縁内外面に波状に残る。体部下半がやや張るが、口縁まで直線的に開く器形である。高台は貼り付け高台で、高台端部の面を作り出している。118は施釉の痕跡が、残存する部分からは見られる。高台部は外側が丸く張りだした形状である。外面底部には糸切り痕がかすかに残る。体部上半がやや張り出すものの八の字状にひらく器形である。119は小碗で、内面に重ね焼きの痕跡が残る。体部が屈曲し外へ開く器形である。高台は面取りされて接地面としているが、やや雑なつくりである。外面底部に糸切り痕がみられる。残存する破片で判断するかぎり無釉である。120～122は皿である。120は外面底部にヘラケズリの痕跡が残り、内外面ともに三叉トチンの跡が残る。高台外面は矩形を呈する。内面の施釉はハケ塗りと思われる。口縁直下でやや内傾する器形である。121も内面に三叉トチン使用の痕跡があり、ハケ塗りによる釉がかかる。外面底部に数字の「3」字状のヘラ記号(?)が残る。口縁直下が玉縁状に段をなす器形となっている。黄味をおびた白色を呈し、他のものと異なる窯で生産された可能性もある。122はやや小ぶりの皿で内面に重ね焼きの痕跡が残る。無釉である。外面底部には糸切り痕・板状圧痕が残る。高台は低く、高台と外面底部は沈線状のくぼみで隔てられているのみである。耳皿は1点(123)確認し得たのみである。脚の高い高台を付けた皿で皿の両端を内側へ曲げて、さらに漬けがけで施釉している。

第6節 白瓷系陶器（山茶碗）（124～177）

いわゆる山茶碗（白瓷系無釉陶器ないしは白瓷系陶器）は、復元しえたものが均質手山茶碗

が9点・小椀3点・皿が8点、荒肌手山茶碗24点・皿9点であった。この数字のみを見れば均質手山茶碗よりも荒肌手山茶碗が多く使用に供されたかに思われるが、後者の方が厚く破損しにくいという点を考慮する必要があり、断言しえない。

1 均質手山茶碗 (124~144)

器壁が薄く、胎土が緻密で焼成も良好な山茶碗の一群である。

a 碗 (124~132)

124は完形品である。腰部がほとんど張り出さずにゆるやかなカーブで口縁部へ移行している。口縁直下でやや外反し口縁端部は面取りされている。内面底部（見込み）は指によるナデがかかる施されている。外面底部は糸切り痕を有し、高台を雑に貼りつけている。高台は低く、楞痕により端部がつぶれている。125は、124に比べて腰部がやや張り、丸みを帯びた器形となっている。外面底部は糸切り痕とうすい板状圧痕が残っている。高台は断面三角形の形状が良く残り、端部の稜がよくのこる。楞痕は端部のみでなく、腰部にも残る。内面底部は指で強くナデられて、底部中央部の器壁が薄くなっている。内面底部と内面体部の境は、円周状に凹み、底部が削り出されたようになっている。126は、体部が底に開き器厚がやや厚くなっている。124・125の高台径が底部の径よりやや小さいのに対し、高台は底部の径とはほぼ同じ径で作られている。高台は断面三角形を呈するが、つけ方はやや雑である。内面底部は三度にわたり指ナデが行われている。外面底部は糸切り痕と板状圧痕が残る。127もやや器壁の厚い均質手山茶碗である。底部径よりやや小さい高台が付けられている。口縁直下でやや屈曲するものの腰部から体部にかけてはごくゆるいカーブをえがく形状である。外面底部には糸切り痕と板状圧痕が残る。高台端部は楞痕でつぶれている。内面底部は三度指ナデされている。内面底部と体部の境は円周状に凹んでいる。128は、体部がやや張り出し、器形に比べて器厚が低く、つぶれた形状の碗である。高台は底部端に丁寧に貼り付けられている。外面底部には糸切り痕と板状圧痕が残る。内面底部には指ナデ痕が残る。内面底部と体部の境はなく、まるく仕上げられている。129は体部がほぼ直線的に開き、口縁直下で外反する器形である。高台は丁寧に貼り付けられているが、低くつぶれている。外面底部は糸切り痕の上に板状圧痕が残る。内面底部は指ナデがなされ、体部との境は凹みが一周している。130も、ほぼ直線的に口縁部に向かって開く器形である。外面底部はうすく糸切り痕が残る。高台は内側は丁寧にナデつけられているが外側は雑である。内面底部は浅い指ナデ痕が残る、体部との境は凹みとなっている。131は、体部下半がやや張るもの

の同様の器形である。内面底部と体部の境は削り残したように成形され、底部が円盤状を呈している。外面底部には糸切り痕が明瞭に残る。132は体部がやや張り出す器形である。内面底部は円盤状を呈し、底部中央部の指ナデ痕は二つ残る。高台は端部がつぶれ台形状を呈する。

b 小碗 (133~135)

口径11cm前後、器高4.5cm前後の小碗である。133は腰部がやや張るが、口縁部に向かって外に開く器形である。底部外面は糸切り痕を部分的にナデ消し、底部径と同じ大きさの高台を付けている。内面底部と体部の境は、浅い指ナデがある。内面には重ね焼きの痕跡が見られる。134は、133のように腰が張らず一直線に口縁部まで開いている。内面底部は浅い指ナデ痕がみられる。高台は断面台形を呈し、底径よりやや小さい。外面底部には不明瞭な糸切り痕が、内面底部には浅い指ナデ痕が残る。135はほぼ同様の器形であるが器壁がより薄く、底部が小さくなっている。

c 皿 (136~143)

器壁が厚く、つくりも丁寧で平面形がほぼ円形を呈するもの(136・137・138・139)と器壁が薄くつくりがやや雑なもの(140・141・142・143)の二種類に分類でき、前者から後者への推移が窺える。59は完形品である。外面底部の糸切りがやや粗いものの、口縁端部は面取りされた丁寧な作りとなっている。体部は底部からやや内湾しながら、外へ開く口縁部にいたる器形で、底部を明瞭に意識したつくりである。内面底部には浅い指ナデ痕が残る。137は底部がやや盛り上がって体部と区別されている。腰部が張りだし、ゆるやかなカーブを描いて、外へ開く口縁部にいたっている。外面底部には糸切り痕の上に板状圧痕が残る。内面底部には二回の指ナデ痕が残る。内面底部から体部は段がない。138は完形品である。外面は、底部と体部の境がかりうじて残る程度で、底部から口縁部までゆるいカーブとなっている。内面底部は深い指ナデ痕が付き、体部との境は凹んでいる。外面底部は糸切り痕の上に板状圧痕が残る。139は、やや張り出した腰部・内面底部と体部の境の凹みなど前二者の特徴をあわせ持ったともいえる形状である。糸切り痕の上に板状圧痕を残す。140~143は、より薄手で、ややひずんだ形状である。140は、口縁部が少し欠損するものの、ほぼ完形品である。141は平面形が楕円形を呈し、底部も平坦でなくつくりが雑な皿である。

d 入子 (144)

薄手で小形のもが1点出土している。

2 荒肌手山茶碗 (145~177)

a 碗 (145~168)

器壁が厚く、胎土中に多く砂粒を含む一群の山茶碗で、形状等から

I類 内面底部と体部に境がなく、緩やかな曲線状を呈し、底部に浅い指ナデが施されたもの。

II類 内面体部の底に近い部分が段をなし、内面底部が円盤上になったもの。

III類 内面底部と体部の境が円周状に凹んだもの。

の3種に分類することが出来る。

I 類 (145~148)

145は器形に比して器高が大きく、体部は底から直線的に外に向かって開いている。内面は底にむかってゆるやかにカーブしている。内面底部はごく浅い指ナデが施されている。胎土中に大きな砂粒も見られるが、高台等の作りは丁寧である。高台の内側は、底部との接着面が多くなるようにナデている。外面底部は高台の横ナデ痕が残るが、糸切り痕・板状圧痕はみられない。146も、器高が大きな山茶碗であるが、内面底部が145に比して小さくなっており、指ナデ痕は反対側が膨らむほど深くなっている。外面底部は高部の横ナデ痕の上に薄く板状圧痕が残る。糸切り痕は明らかでない。高台自体は粘土紐が一周せず、空白部分も見られるなど、つくりがやや雑になっている。高台端部には靱痕もみられる。147・148は器径が大きく、より外へ開く器形となっている。147は外面底部に糸切り痕を有し、端部には靱痕が残る。内面は底部が大きくなっているが指ナデ痕は見られない。148は高台を、内側・外側とも角度をつけて貼りつけており、断面の形状は二等辺三角形にちかい。不明瞭な板状圧痕が見られる。内面底部はごく浅い指ナデ痕が残る。

II 類 (149~153)

底部と体部の境に稜があり、あたかも底部が円盤状に盛り上がったようにみえるものがこれにあたる。おおむね高台は、端部が切り立ったようにならず、内へむかってなだらかな傾斜で底部に貼り付けている。また高台外面も、腰部の傾斜とほぼ同じとなっており、外面底部をくり抜いたような形状を呈するものがある。149は

SD05の埋土上部より出土している。体部がやや張り出す器形である。内面底部は二度の指ナデ痕が残る。150もSD05埋土上部より出土した。内面底部と体部の境は凹みをつけて、底部を残した形状になっている。指ナデはやや深い。外面底部は不明瞭ながら糸切り痕がみられる。高台は低く、接地面の大きな太いものとなっている。端部に靱痕が残る。151は、SD05埋土下部より出土した。高台は低く潰れ、靱痕の残る端部は稜がなく丸い。外面底部には糸切り痕が残る。底部中央部には二度の浅い指ナデ痕跡が残る。152は内面底部がまるくナデられているのが他と異なる。他の指ナデが、深淺の違いはあるものの直接的であるのに対し、この個体は右手親指で反時計回りに円を描いている。高台は端部が丸く、雑な作りになっている。外面底部の糸切り痕はみられない。153はSD05埋土上部より出土した。高台は低く潰れ、つけ片もかなり雑である。粗い糸切り痕が、かすかに見られる。内面底部は2度の指ナデ痕が残る。やや張り出した体部と口縁直下で外反する器形は他に共通するものである。

III 類 (154~161)

内面底部と体部の境が凹んでいるものをここに一括した。内面底部端に稜が形成されていないものをすべてここにあげたのであるが、凹みというよりも境の部分をただ浅くナデただけのものから、深く凹ませたものまでである。前者に属するものとして、154~161があるが、体部がやや張り出し口縁が外反する器形であることや、高台がほとんど体部と一体化したように低くつぶれていることが共通する。内面底部の指ナデはごく浅いもの(154・156・158)から、深いもの(159)まで様々である。この中で、158・160は先に挙げた、149・150・153とともにSD05の埋土上部からまともな状態で出土したと考えられる状態でも出土した。後者の山茶碗(162~167)は焼成が良く、胎土中に砂粒をあまり含まず、器表が平滑なものがほとんどである。高台については端部を尖らせたものと、高台内面を広くナデつけているものの二種類がある。内面底部の指ナデはおおむね深い。

b 皿 (169~177)

復元し得たものは9点ある。内面底部と体部の境に凹まないしは段が付くものと、内面が体部から底部にいたるまで段が付かず曲線をなすものの二つに分けられる。前者(169・170・171)はいずれも外面底部に粗い糸切り痕を有する。169・170は底部全体が盛り上がった形状となっている。169は浅く二度の、170は

一度の深い指ナデ痕がある。171は底部が扁平であり自然釉が付着している。後者の皿(172~177)は、内面底部の指ナデ痕はみられない(173・175)か、きわめて浅くなっている。172が体部がやや張る器形であることを除けば、他は直線的に外へ開く器形となっている。174・175・176は完形品である。

第7節 中近世陶器類(178~193)

古瀬戸系の施釉陶器・常滑焼・中国陶磁等が出土した(註10)。

178・179は古瀬戸系施釉陶器の碗である。緑色の釉が内外面にかかる。15世紀前葉の所産と考えられる。181は摺鉢、184は天目茶碗である。184は井戸底からはほぼ完形で出土した。アナ窯最末期の所産と思われ、年代的には15世紀後葉と考えられる。常滑焼(185~193)については確認しうる器種は大甕のみである。口縁部の形状から、図示した順に推移したと思われるが、13世紀前葉までと、時間的な幅が大きくなっている(註11)。古瀬戸系の施釉陶器については、最も古い(12世紀後半)と思われる壺胴部(182)から、15世紀後葉と考えられる天目茶碗(184)まで、一時期に集中せず、やはり時期的にバラツキが見られる。

註 11 中世陶器類の一部については藤澤良祐氏(瀬戸市教育委員会)に実見していただき種々ご教示いただきました。記して謝す次第です。

註 12 赤羽一郎 「4. 常滑焼の変遷」『常滑焼』 1974

第8節 土師質土器(皿)(194~272)

釉のかからない素焼きの土器で、俗に「かわらけ」と称される皿で、数箇所集中的に投棄された形で出土した。完形品、ないしは接合して完形に近くなる個体あわせて79点を図示したが、破片も含めれば、百数十点となる。形態・成形・調整技術などから、次のように分類できる。

I 類(194~210)

城之内遺跡出土の土師皿のうちで最も多いタイプである。径は12cm前後、器高は2~

2.5cmをはかる。円板状の粘土を折り曲げて成形しているが、その際、外面胴部下部（立ち上がり部）を強く押圧しており、指全体や指先の跡が明瞭に残る。底の端を支点に指で引き上げて成形したものと思われる。内面は、底部中心部を残して、円周状にナデられている。ナデの最後は、ナデはじめた部分につながらずナデの原体が器表面から離れて外へ飛び出しており、上から見ると「の」の字状となっているのが大きな特徴と言えよう。若干の歪みや器高や器厚の違いはあるものの、径はほぼ同じであり、うすい粘土板から連続的に円板をとる技術があったと思われる。大量生産の必要から簡便な成形技術が生み出されたといえるが、器高等のバラツキは省力化に伴って生じたものといえようか。

II 類 (211~225)

外面立ち上がり部分を強く押圧し、内面のナデが「の」の字状を示すことなど、成形技法はI類と全く同じである。異なる点は法量で、径12cm前後、器高2~2.5cmをはかる。I類が小型化した成立したものか、I類とセット関係をなすかは明らかでない。ただ時代が下るにつれ、製作工程が簡略化されてゆくのが全国的な趨勢のようであり、今のところは後者の考えとしておきたい。

III 類 (226~232)

小型の皿であるが、口縁部外面を一周する横ナデが施される。内面のナデは「の」の字状にならず、丸く円を描いている。ナデが施されないものもある。径9cm前後・器高2~2.5cm前後をはかる。後述する小形の皿に比して、器壁がやや厚い。また歪んだ器形のものが少ない。

IV 類 (233~236)

径8cm・器高2cm前後の皿で、口縁端部を直立させている点が他と異なる。口縁外面は横ナデが施される。内面のナデは「の」の字状のものと円周状のもの（ナデの原体が最後まで器壁からはなれないもの）の二種類がある。底の凹凸が大きく、器表面が部分的に黒くなっている（煤げている？）のもこのタイプの皿の特徴である。

V 類 (237~251)

小形の皿の中では出土数の最も多いものがこのタイプの皿である。径8cm前後・器高2cm前後で、個体間の法量のバラツキが少ない。内・外面のナデは全く見られない。円

というよりも楕円形の平面形をなすものが多い。うすく大きな粘土板から円板を連続的に切り離す技術があったことは、法量にバラツキが少ないことから窺えるが、成形工程の省略で楕円状の歪んだ皿になったものと思われる。具体的には、粘土板を指で引き起こして成形していたものを、当て具や肘にあてて丸みをつくるようになったかと思われる。

VI 類 (252~259)

胴部下半がやや張って丸みをおびた器形で、口縁外面に横ナデを施し、内面は胴部をまるくナデている。内面底部については、直線状にナデているものと、何もないものの二つが存在する。径12cm前後・器高2.5cm前後で、器壁は出土土師皿中最も薄いもののひとつである。外面底部・立ち上がり部に押圧による凹凸がある。同様に外面に横ナデが施されるⅢ・Ⅳ類の土師皿に比べると、口縁部が直立している点が大きな相違である。

VII 類 (260~262)

径16~18cm、器高3cm前後の大形器で、内面には時計回りのナデを施す。ナデの最終で原体が外へ飛び出す「の」の字状にはなっていないが、完全の円周状の(ドーナツ状の)ナデにはなっていない。内面底部にはナデなどは見られない。外面には横ナデは施されていないが、胴部の立ち上がり部分に指による押圧の痕跡が残る。260は、爪と思われる圧痕もみられる。完形品3点・破片を2点検出した。このタイプの土師皿はこの5点以外見つかっていない。また、出土状態も特異で、260と261は、260を下にして、261をさかさまに伏せた状態で出土している。

VIII 類 (264~272)

IからVII類に分類しえないものを、VIII類として、すべてここに挙げた。264は、器形はVII類とした土師皿に似ているが、形が正円ではなくかなり歪んでおり、口縁外面の横ナデは見られない。口唇部分に煤(?)が、ほぼ全周にわたって付着している。266は、口縁外面の横ナデ・内面の完結したナデはVI類の皿と同じであるが、器壁がかなり厚い。VI類と同一に扱うことは、不適当と思われ、ここに挙げた。265も同様である。267は厚手の、やや歪んだ器形の皿である。口縁外面にナデが施される。内面胴部も丸くナデられるが、ナデの最後が器表面から離れておりやや雑なつくりである。指で強く立ち上がらせて、皿というよりも椀に近い器形となっている。268は口縁端部を折り曲げているもので、口縁外面の横ナデは見られない。内面のナデは、一部欠失し

ているため、明らかでない。269は、円周の2分の1程度しか残存していない。内面は明瞭なナデの痕跡は見られないが、口縁外面は器壁が凹むほど強くナデられている。270は、出土した土師皿中、もっとも小さいが、成形は丁寧である。内面は「の」の字状のナデ、口縁外面は横ナデがなされる。口唇部は黒く煤けている。類似のものは他に出土していない。271は、他の土師皿とは全く異なるもので、ロクロ成形によるものと思われる。底部は糸切りの痕跡が残る。内面はマキアゲによると思われる渦巻き状の凹凸が残る。これも、数百片の土師皿のうち1点のみの出土例である。272は、口縁直下がやや厚く内面のナデは「の」の字状である。白色に近い褐色を呈し、焼きがきわめて良い。

第9節 土錘・石錘（273～468）

197点（土錘196点・石錘1点）の出土をみたが、この点数は岐阜市調査時の出土数8点に比べて異常に多いと言えよう。他の項でも述べたが、距離的に極めて近接しており、ほとんど同一の遺跡と考えて良いと思われる。岐阜市・岐阜県の調査区域であるが、出土遺物については必ずしも同様の様相を示していないことが興味深い。今回出土した土錘・石錘は次のように分類した（註12）

- I類 石 錘
- II-1類 管状土錘1類（球状土錘）
- II-2類 管状土錘2類
- II-3類 管状土錘3類
- II-4類 管状土錘4類
- III 棒状土錘
- IV 大形品その他
- I類 石錘（273）

1点のみ出土した。長径46'、短径39～40'の楕円形の礫に屈曲した溝をつけたものである。

II 管状土錘（274～463）

土製品の中央に穴をあけたもので、長軸断面の形状や、長さとの比率から5つに分類した。

II-1類 管状土錘1類（274）

軸断面が円形を呈し、球形土鍾ともいえるものである。2点出土している。273は溝SD09の埋土中から出土したもので、径3.5cm程度の球形の土製品に径11%の孔をうがち両面を平らにしている。

II-2類 管状土鍾(275~300)

長さに依りて幅が2分の1以上あるもので、やや寸詰まりな形状を呈している。径5~6%程の穴を開けてあり、中央からやや膨らんで端部へ移行している。軸断面は楕円形ないしは円形を呈するものがほとんどである。22点出土している。

II-3類 管状土鍾3類(301~402)

長さに対して幅が2分の1未満で3分の1以上のものを3類とした。102点出土しており、本遺跡出土のものでもっとも多いタイプである。長さ45%前後・最大径21~22%を示すものが多い。

II-4類 管状土鍾(403~463)

長さに対して幅が3分の1未満の形状の細長い土鍾である。長さが50%前後と40%前後のもの、大きく二つに分けることが出来る。穴の径はいずれも4~5%である。

III類 棒状土鍾(464~465)

直方体状の土製品の、端部に近い部分に孔をあけたもので、2点出土している。763は黒褐色を呈し、出土土鍾中もっとも長いものである。

IV類 その他(466~469)

465は、軸断面が隅丸方形に近い形状をなす管状土鍾で、長さとの比率ではII-2類となる。茶褐色を呈し、焼成は良い。

註 13 分類にあたっては下記の論考を参考とした。

渡辺誠「縄文時代の漁業」1975

和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』1982

和田晴吾「弥生時代の漁網鍾」『弥生時代の研究 1』1986

第10節 その他の遺物（470～474）

470は滑石製の勾玉である。471は、土製の紡錘車かと思われる。472～473は手づくねの土器で473はSD01の埋土中より出土している。いずれも指の押圧による凹凸が明瞭に残る。474は犬(?)を模したと考えられる土製品である。やはり、SD01の埋土中から出土した。

土 錘 計 測 値 一 覧 表

実測番号	全 長	全 幅	類 型	重 量		実測番号	全 長	全 幅	類 型	重 量	
274	32.1	36.7	Ⅱ-1	18.2		306	39.7	19.1	Ⅱ-3	12.3	
275	42.5	25.1	Ⅱ-2	24.7		307	44.0	19.0	Ⅱ-3	14.2	
276	37.9	21.1	Ⅱ-2	21.1		308	(44)	18.0	Ⅱ-3	14.7	
277	34.7	17.6	Ⅱ-2	13.0		309	42.1	20.8	Ⅱ-3	16.1	
278	32.2	20.1	Ⅱ-2	13.9		310	20.0	34.3	Ⅳ-5	19.6	
279	36.4	20.0	Ⅱ-2	14.4		311	40.4	19.8	Ⅱ-3	15.9	
280	58.2	14.8	Ⅱ-4	14.3		312	41.8	15.9	Ⅱ-3	13.3	
281	35.7	22.1	Ⅱ-2	14.2		313	45.8	20.1	Ⅱ-3	18.6	
282	39.8	21.2	Ⅱ-2	16.9		314	39.9	18.2	Ⅱ-3	21.4	
283	40.5	21.5	Ⅱ-2	17.4		315	39.2	19.0	Ⅱ-3	14.5	
284	43.0	22.0	Ⅱ-2	17.9		316	43.4	20.4	Ⅱ-3	16.0	
285	42.7	21.5	Ⅱ-2	15.4		317	43.8	17.9	Ⅱ-3	13.6	
286	41.4	23.5	Ⅱ-2	21.0		318	41.2	19.4	Ⅱ-3	12.7	
287	36.2	21.3	Ⅱ-2	13.4		319	45.0	21.8	Ⅱ-3	19.3	
288	38.0	23.1	Ⅱ-2	18.1		320	43.7	17.0	Ⅱ-3	13.6	
289	39.2	19.9	Ⅱ-2	15.5		321	43.1	17.8	Ⅱ-3	12.9	
290	34.1	19.8	Ⅱ-2	15.6		322	43.5	17.0	Ⅱ-3	13.9	
291	41.6	23.2	Ⅱ-2	19.4		323	46.8	20.0	Ⅱ-3	14.6	
292	37.0	20.0	Ⅱ-2	15.3		324	40.0	16.3	Ⅱ-3	9.4	
293	36.8	24.1	Ⅱ-2	20.6		325	45.2	20.9	Ⅱ-3	17.6	
294	39.0	22.6	Ⅱ-2	17.0		326	47.0	21.6	Ⅱ-3	11.8	
295	40.4	23.3	Ⅱ-2	20.5		327	44.0	19.0	Ⅱ-3	12.0	
296	41.2	22.6	Ⅱ-2	19.1		328	45.7	19.2	Ⅱ-3	16.9	
297	45.8	27.3	Ⅱ-2	34.8		329	48.2	17.7	Ⅱ-3	19.4	
298	49.1	25.1	Ⅱ-2	28.3		330	43.6	19.3	Ⅱ-3	14.7	
299	(30)	17.7	Ⅱ-2	8.4		331	36.5	18.0	Ⅱ-3	11.0	
300	35.8	12.6	Ⅱ-2	5.2		332	44.0	20.7	Ⅱ-3	17.7	
301	38.8	19.1	Ⅱ-3	12.9		333	46.7	19.7	Ⅱ-3	16.8	
302	39.1	19.3	Ⅱ-3	13.5		334	43.0	19.0	Ⅱ-3	11.6	
303	42.2	19.3	Ⅱ-3	13.5		335	44.5	20.0	Ⅱ-3	12.5	
304	47.9	21.9	Ⅱ-3	19.1		336	48.1	17.9	Ⅱ-3	18.8	
305	47.9	20.8	Ⅱ-3	19.7		337	43.0	17.2	Ⅱ-3	14.2	

突圍番号	全 長	全 幅	類 型	重 量		突圍番号	全 長	全 幅	類 型	重 量
338	39.9	17.2	Ⅱ-3	9.6		370	44.0	20.1	Ⅱ-3	11.5
339	41.2	17.8	Ⅱ-3	12.3		371	(50)	18.9	Ⅱ-3	13.9
340	41.5	17.3	Ⅱ-3	12.9		372	44.0	15.1	Ⅱ-3	7.3
341	40.9	19.0	Ⅱ-3	13.9		373	46.1	18.9	Ⅱ-3	21.0
342	40.0	17.2	Ⅱ-3	13.2		374	(42)	24.1	Ⅱ-3	12.5
343	44.0	21.4	Ⅱ-3	16.6		375	(50)	18.5	Ⅱ-3	18.4
344	42.1	21.1	Ⅱ-3	18.4		376	50.8	23.3	Ⅱ-3	26.4
345	44.9	20.0	Ⅱ-3	17.2		377	58.6	21.2	Ⅱ-3	23.6
346	44.2	18.1	Ⅱ-3	15.5		378	(60)	20.0	Ⅱ-3	25.0
347	39.5	19.0	Ⅱ-3	15.1		379	55.0	23.0	Ⅱ-3	18.3
348	43.0	17.5	Ⅱ-3	13.2		380	51.9	20.9	Ⅱ-3	18.3
349	46.9	19.7	Ⅱ-3	14.4		381	50.1	20.2	Ⅱ-3	18.3
350	45.0	17.9	Ⅱ-3	13.4		382	49.0	20.1	Ⅱ-3	16.9
351	48.1	17.9	Ⅱ-3	15.1		383	48.9	22.9	Ⅱ-3	28.6
352	47.9	17.9	Ⅱ-3	15.2		384	50.1	25.0	Ⅱ-3	30.1
353	46.9	19.0	Ⅱ-3	17.0		385	61.9	21.9	Ⅱ-3	25.3
354	45.9	17.0	Ⅱ-3	11.6		386	50.6	20.6	Ⅱ-3	18.9
355	42.0	15.3	Ⅱ-3	8.7		387	52.0	21.3	Ⅱ-3	21.2
356	41.9	15.4	Ⅱ-3	9.6		388	52.0	23.0	Ⅱ-3	22.9
357	41.0	15.8	Ⅱ-3	10.7		389	51.0	22.1	Ⅱ-3	24.6
358	44.9	17.3	Ⅱ-3	16.0		390	45.4	20.3	Ⅱ-3	15.8
359	49.1	17.2	Ⅱ-3	16.2		391	45.1	15.2	Ⅱ-3	7.8
360	47.8	16.2	Ⅱ-3	10.6		392	36.9	15.0	Ⅱ-3	7.4
361	48.3	20.7	Ⅱ-3	23.1		393	40.1	15.0	Ⅱ-3	7.5
362	(60)	20.5	Ⅱ-3	19.8		394	35.2	13.0	Ⅱ-3	6.8
363	42.0	20.1	Ⅱ-3	8.6		395	37.0	15.5	Ⅱ-3	7.9
364	(52)	19.5	Ⅱ-3	15.4		396	35.3	12.5	Ⅱ-3	4.3
365	(38)	16.8	Ⅱ-3	10.5		397	38.5	15.0	Ⅱ-3	8.7
366	(50)	21.3	Ⅱ-3	16.3		398	38.4	14.8	Ⅱ-3	8.9
367	46.5	18.2	Ⅱ-3	12.2		399	38.3	12.7	Ⅱ-3	5.3
368	(50)	16.9	Ⅱ-3	11.0		400	37.8	12.1	Ⅱ-3	5.2
369	41.9	19.2	Ⅱ-3	12.4		401	36.0	12.5	Ⅱ-3	4.5

实例番号	全 长	全 幅	類 型	重 量		实例番号	全 长	全 幅	類 型	重 量	
402	(40)	13.7	Ⅱ-3	6.2		434	45.0	13.9	Ⅱ-4	10.1	
403	67.9	18.5	Ⅱ-4	19.8		435	53.4	14.2	Ⅱ-4	10.2	
404	56.0	16.8	Ⅱ-4	15.3		436	45.8	15.1	Ⅱ-4	9.9	
405	58.0	16.5	Ⅱ-4	15.5		437	45.3	15.0	Ⅱ-4	9.0	
406	58.8	18.0	Ⅱ-4	18.5		438	46.4	14.8	Ⅱ-4	8.4	
407	58.0	16.8	Ⅱ-4	14.1		439	44.7	14.8	Ⅱ-4	10.5	
408	61.8	16.3	Ⅱ-4	17.5		440	47.9	14.8	Ⅱ-4	9.3	
409	56.2	14.7	Ⅱ-4	17.0		441	52.0	14.0	Ⅱ-4	10.1	
410	(80)	18.2	Ⅱ-4	19.1		442	49.2	14.4	Ⅱ-4	9.8	
411	59.3	17.4	Ⅱ-4	16.4		443	46.4	14.5	Ⅱ-4	8.0	
412	59.1	17.8	Ⅱ-4	16.5		444	47.9	15.0	Ⅱ-4	10.6	
413	58.2	14.8	Ⅱ-4	14.3		445	47.9	15.1	Ⅱ-4	10.4	
414	56.4	16.7	Ⅱ-4	12.5		446	47.1	14.9	Ⅱ-4	10.2	
415	54.8	16.0	Ⅱ-4	11.2		447	51.2	12.5	Ⅱ-4	6.1	
416	54.2	13.8	Ⅱ-4	8.0		448	(60)	15.3	Ⅱ-4	9.9	
417	49.2	14.9	Ⅱ-4	9.1		449	47.3	14.0	Ⅱ-4	8.6	
418	47.0	13.8	Ⅱ-4	10.8		450	(60)	14.2	Ⅱ-4	8.5	
419	50.8	15.4	Ⅱ-4	12.2		451	43.3	13.9	Ⅱ-4	7.6	
420	49.3	14.1	Ⅱ-4	14.9		452	42.1	12.9	Ⅱ-4	7.2	
421	46.5	13.8	Ⅱ-4	9.5		453	(45)	14.6	Ⅱ-4	9.3	
422	45.9	14.7	Ⅱ-4	10.1		454	42.2	11.5	Ⅱ-4	5.4	
423	45.0	14.0	Ⅱ-4	10.6		455	(54)	13.7	Ⅱ-4	4.9	
424	48.2	16.1	Ⅱ-4	10.8		456	38.0	12.1	Ⅱ-4	4.7	
425	47.8	15.2	Ⅱ-4	9.9		457	(50)	14.5	Ⅱ-4	5.3	
426	51.8	15.3	Ⅱ-4	13.9		464	56.2	19.6	Ⅲ-5	29.9	
427	(64)	14.2	Ⅱ-4	9.9		465	68.8	28.0	Ⅲ-5	69.5	
428	48.7	15.6	Ⅱ-4	9.9		466	47.5	37.1	Ⅳ-5	47.3	
429	50.8	14.4	Ⅱ-4	9.5		467	59.0	44.8	Ⅳ-5	97.0	
430	48.0	15.8	Ⅱ-4	11.2		468	48.8	40.2	Ⅱ-1	37.7	
431	50.2	14.9	Ⅱ-4	9.8		469	32.1	30.4	Ⅳ-5	33.7	
432	50.8	11.8	Ⅱ-4	6.4							
433	45.2	14.1	Ⅱ-4	8.5							

第5章 「総括ならびに考察」

第1節 出土遺物の性格・年代等について

1 土師器

S字状口縁付甕・高坏・器台・小型丸底壺・甌形壺・甕等、様々な器種が出土している。細片も含めれば、城之内遺跡出土遺物の中で量的にもっとも多い。この時期が第一の画期と言えよう。ただし、何度も述べたように出土状況がいちじるしく不良であるため、各器種の形態の変遷・セット関係等をつかむことができない。そのため、ここでは他地域の事例を参考として、編年の位置について考えたい。このことは他の遺物についても同様である。

S字状口縁台付甕は、「外面調整（2次的なハケメ）」「器壁（薄さを保有）」「独特な有段口縁」「台付甕」（註14）の要素を持った甕とされ、主に口縁部の形状により、4つに分類されているが、城之内遺跡出土のものは、このA類～D類すべてに分類できる。時期的にはA→B→C→D類と変遷するとされており、本遺跡からすべてのものが出土したことは、ある程度の時間幅をもって遺跡が営まれたことを示すかと思われる。またその他の器種については、主に尾張地域での出土例からその消長が検討されている（註15）。これによれば、甌形壺・小形器台及び高坏はそれぞれ 2期、3期に現れるとされている。S字甕・その他の器種とも、先に述べた中世陶器類と同様に、年代的にやや幅があるようであり、属する時期は欠山期末から元屋敷期前葉となろう。土器の年代からは特に画期となるような時期が見られないことは興味深い。住居跡・大溝・ピット群などの存在から出土遺物がかなり狭い年代幅で捉えられるか当初は想定していたがそうはならなかった。このことは、発掘調査区域が遺跡の中心から外れていたことによるものか、あるいはそのような在り方（ある程度長期にわたって小規模な生活が断続的に営まれた）を示すのが城之内遺跡の特徴であるのか、いずれかであろうと考えられる。

2 須恵器

本遺跡出土の須恵器の初現は、II型式4段階（註16）と考えられる。以後の時期のものもほぼ空白を生じずに現れ、おおむねIV型式の終わりまで続いたと考えられる。量的に多いのは、III型式2段階に現れるとされている有台の坏身片であった。セット関係をなすと思われる蓋坏はほとんどが内面にカエリの無いものであることから、IV型式1～2段階にひとつの

画期があったと考えられる。実年代では、8世紀の第一四半期から第二四半期があてられている。

次に、これら製品の供給地であるが、各務原稲田山古窯跡群中の須恵器に特徴的な色調や、岐阜市老洞古窯跡群で焼成された美濃国刈印須恵器の存在から、城之内遺跡土須恵器の一部は、美濃須衛古窯跡群中の窯から製品の供給を、すべてではないにしても受けていたことは明らかである。幸い、美濃須衛古窯跡群の中では稲田山古窯跡群・老洞古窯跡群とも正式な発掘調査が実施され、報告書も刊行されており（註17）、また美濃須衛古窯跡群全体についても研究が進められている（註18）。これらによれば、当該時期の須恵器は、美濃須衛古窯跡群の編年では、Ⅳ期に相当すると思われる。この時期には、美濃須衛古窯跡群全体として「窯数のうえでも、器種的内容についてもさらに飛躍的發展をみせる」時期とされている（註19）。このことがただちに官による大量供給要請の結果であるとは考えられない。しかし、当時の美濃国では、広域条里の設定・不破関の整備・吉蘇路の開削等が行われており、こうした事情を背景として需要が増加していたと考えることも、あるいは出来るのではないだろうか。

3 土師皿

出土した土師皿については、8つに分類したが、成形技術においてかなり差異があり、一部を除いて、ある程度の時間幅を持つのではないかと考えられる。成形技法においてまず第一に異なるのは、ロクロ成形か、非ロクロ成形によるものか、である。前者に属するものはⅧ類の271一点のみであり、他はすべて手づくね、ないしは型押し(?)による非ロクロ成形によるものである。ロクロ成形による土師皿は、岐阜市調査時においても一点も発見されていないようであり、ロクロ成形による土師皿が盛行した時期には、城之内遺跡は営まれていなかったことがうかがえる。隣国である尾張における出土例の研究では、ロクロ成形の土師皿は「11世紀から12世紀代いっぱいまでの時期に」出現するようであり、非ロクロ成形のものに先行し、のちに非ロクロ成形の皿に淘汰されるとされている。また淘汰される時期としては、9世紀が想定されている（註20）。

城之内遺跡出土の土師皿の圧倒的多数を占める非ロクロ成形のものについては、成形技術等で分類でき、その内のいくつかについては、時間的な前後関係を想定できるのではないかと考えられる。その際のメルクマルとなるのは法量と製作技法の変化であろう。平安京城における豊富な出土事例を対象とした研究では、皿の製作については「工程の省略と法量の縮小化を指向」（註21）し、これが14世紀にいたるまでの傾向とされている。まず工程について着目すれば、大きな特徴としては、口縁部外面の横ナデの有無を挙げることができる。

円盤状の粘土から皿を製作する場合に指で粘土の周囲を持って引き上げて成形したことが想定できるが、口縁部外面に横ナデを施すことは、焼成前の形くずれの防止等にそれほど有効であったとは考えにくい。おそらく量産化する段階で形骸的に残っていた工程が省略されていったと考えるとうまく説明がつく。次に形態について考える。円盤状の粘土の周囲を引き起こす場合、VI類のように腰部に丸みを持たせたものと、I・II類の土師皿を比べると、一個あたりの製作に要する時間の差は大きいと考えられる。小形の皿についても同様であり、丁寧なIII・IV類に対して、雑なV類ということが言えよう。V類のうちの、楕円形の平面形をなすものについては、肘(?)に粘土板をあてて成形したとも考えられ、量産化を指向した結果ではなからうか。以上まとめれば、口縁外面横ナデの有無と断面(立ち上がり)の形状により、

VI類 → I・II III・IV類 → V類

という大まかな変遷が想定できる。

最後に着目すべきは内面ナデの形状であろう。ナデ原体を最後まで器表から離さない円周状のナデと、ナデ原体を最後に離す「の」の字状のナデの二種類がみられるが、前者が先行するのではないかと思われ、III類 → IV類の変遷を今のところは想定しておきたい。

工程の省略化と言う点ではかなりうまく説明しうる部分もあるが、もう一つのメルクマルである法量の縮小という点では必ずしも明瞭な変遷を迎えることができない。製作技法が同じI・II類について、I→II類という変遷を想定するか、同時期に併存したセット関係で捉えるかは全く断言し得ない。ただ、文献による土師皿の実際の使用例の研究によれば、口径12cm前後の土師皿を「三度入」に、9cm前後のものを「二度入」に想定しており(註22)、単純に法量を比較すればこの想定にそのままあてはまる。今後の出土例の増加を待って検討すべきであろう。

VII類とした皿については、14世紀までの縮小傾向から当然外れるものであり、15世紀以降の産物と考えて差し支えないと考えられる。

VII類とした土師皿については、形態からも出土量からも、I～VII類に属さない、規格外といった感があり、過渡の様相を示すものといえるかもしれない。またほとんどが1点のみの出土であることも注意すべきであろう。この中で城之内遺跡出土土師皿の、あるいは初原となるかと思われるのが267である。器壁が他に比べて厚く、口縁外面は明瞭な横ナデがみられる。側面は強く引き起こしており、指の押圧痕が顕著に器表面に見られる。SD05埋土中から検出したが、類例はない。完形品である。あくまで推論でしかないが、VI類とした土師皿とともに、本遺跡出土の土師皿の中で、最も古いものである可能性を、とりあえずは指摘しておきたい。

4 山茶碗

山茶碗については、復元しうるものが54点出土している。特に東海南部系と一般的に言われる「荒肌手山茶碗」の遺存が良い。ただこのことが荒肌手山茶碗の使用が「均質手」のそれを上回っていたことを示すとは考えられず、厚手によるため遺存度が良好であったと解すべきであろう。荒肌手山茶碗については、窯跡出土例を中心とした編年研究が進んでいる。その成果によれば、口縁付近の漬け掛けによる施釉の有無・高台の高さ・胎土の粗密や砂粒の混入度等の経年変化を追求することで4段階10型式に分類され、その生産期間については、おおむね11世紀中葉から15世紀前半とされている。城之内遺跡出土の山茶碗については、「(内面)底部と体部の境の稜」(註23)の存在から、Ⅱ類としたものがⅢ段階第7型式に、また、「見込み(内面底部)中央部と体部内面との接点が浅く凹む」(註24)形態から、Ⅲ類としたものがⅢ段階第6型式にそれぞれ相当する。なお、Ⅰ類については見込みにつけられた指ナデをその分類の基準としたが、すべて同一範疇にはいるものではないようである。指ナデについては、第7型式以降顕著となるとされており、Ⅰ類のものはこれ以降の時期になるものと、とりあえずしておきたい。なお、年代としては、第6型式が13世紀前葉に、また、第7型式が13世紀後葉とされている。次に荒肌手の皿については、底部全体が盛り上がったような型状の106・107・48は第5型式に属するようであり(註25)、碗の編年的位置よりも若干遅ることとなる。年代としては12世紀後葉があげられている。その他の皿については、第6型式以降の所産と考えられる。

均質手山茶碗については、東濃地方の生産遺跡出土例を中心とした数多くの研究がある(註26)。これらによれば、美濃地方の均質手山茶碗は、指ナデの存在から白土原1号窯期以降は必ず内面底部に指ナデがみられることや、その形状から、城之内遺跡出土の山茶碗は白土原1号窯式期から大畑東1号窯式期の所産と考えられる(註27)。またその実年代としては13世紀後半から14世紀後半までを想定できる。

註 14 赤塚次郎「S字甕」『欠山式土器とその前後』 1986

註 15 宮腰健司「尾張における欠山式土器とその前後」『欠山式土器とその前後』
愛知考古学談話会 1987

註 16 中村浩「第2章 編年的考察」『和泉陶器窯の研究』 1984

註 17 大江甲『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』 各務原市教育委員会 1983

註 18 渡辺博人「考察」『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』 各務原市教育委員会 1986

註 19 佐藤公保「中世土器研究ノート ①」『年報 昭和60年度』 財団法人愛

知県埋蔵文化財センター 1985

- 註 20 伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987
なお、土師皿については内畑信雄氏（岐阜市教育委員会）より多大なるご教示を頂きました。記して謝す次第です。
- 註 21 横田洋三「出土土師皿編年師案」『平安京左京五条三坊十五町』平安京跡調査報告第5輯 1981
- 註 22 藤澤良祐「瀬戸古窯跡群 I 3. 山茶碗の型式編年」『研究紀要 1』瀬戸市歴史民俗資料館 1981
- 註 23 前掲註22に同じ
- 註 24 前掲註22に同じ
- 註 25 前掲註22に同じ
- 註 26 田口昭二「美濃窯の山茶碗研究と編年」『マージナル No.7』愛知考古学談話会 1987
この他に下記の論考も参考にさせていただいた。
田口昭二「美濃窯における白瓷と山茶碗」『美濃陶磁歴史館報 II』美濃陶磁歴史館 1983
- 註 27 山内伸浩氏（多治見市教育委員会）のご教示による
125は明和1号窯式、136は白土原1号窯式、138は明和1号窯式以後、140は大洞東1号窯式期に、それぞれ属すると思われる。

第2節 考察ならびに結語

この発掘調査を通じて、明らかにしうると最も期待されたのは、長良庵寺の遺構の検出であろう。この遺構確認こそが調査のめざすところの一つであり、瓦類の採集・岐阜市の発掘調査の知見等から寺院跡の遺存が大いに期待された。

結論から述べれば、調査区域内には寺院跡の存在を確実視する遺構は存在しなかった。瓦類等寺院跡に伴うと考えられる遺物が極端に少なかったとその理由の一つである。瓦類は平瓦20点・丸瓦5点の出土にとどまっている。この出土数は、半分以下の面積（約1,200㎡）で1万数千点が出土したとされる岐阜市の発掘調査と比べると、著しく少なく、出土遺物の数から考えると、寺院の存在の確証は今回の調査区域に関するかぎり確認しえなかった。ただし、8

世紀の第一四半期を中心とした時期の須恵器がかなり集中的に出土したことは、この地に寺院なり駅家なりの建物が存在していたことを示すものであろう。当然東山道との関連も考えられる。今回の発掘調査区域内には明確なプランで建物の存在を示すものが発見できなかったが、そのことが必ずしも寺院跡・駅家等の存在を否定するものではない。美濃国刻印須恵器や硯の出土は、他の多くの刻印須恵器出土遺跡の特徴から考えて、公的性格の建物の存在を示唆するものと考えて差し支えないのではなかろうか。

今回の岐阜県教育委員会による調査と昭和61年度に行われた岐阜市教育委員会による発掘調査で、寺域と想定しうる範囲内のある程度の面積（両方の調査で約4,200㎡）について発掘調査を行ったこととなるが、基壇等の、明確に寺院跡であることを示す遺構を検出することが出来なかった。岐阜市教委による調査で人面瓦が出土したことはよく知られていることであるが、これも遺構に伴うものではない。こうした状況は、長良廃寺と称せられる寺院の性格の一端について考えるべきことといえよう。この長良廃寺が、美濃国内の壬申の乱の功労者に体する論功行賞的なものであったことは多くの先学の説かれるところであるが、今後解明すべき問題はその性格や規模であろう。残念ながら同時期の寺院跡で全容が明らかになったものが少ない現状であり、もとより類推の域を出ないのであるが、「七堂伽藍」といった言葉で表せるような大規模なものでなかった可能性が大きいのではなかろうか。この地に比定しうる長良廃寺について、公的な役割を持った建物の内部に仏殿が存在した可能性について示唆した論考があるが（註28）、今回の発掘調査の結果を見るかぎりではこの考え方が最も説得力を持つといえるのではなかろうか。

今回の調査で遺物のみが大量に出土し、遺構が良好に検出することが出来なかった最大の要因は、中世以降現代に至る地形改変であろう。昭和61年度の岐阜市教委の発掘調査で、かなりの数の瓦が出土したにもかかわらず、あるいは今回のややまとまった面積の調査でも、明確な寺院跡遺構が検出し得なかった原因は、寺院跡が発掘調査区域内になかったとも、もちろん考えられるが、後世の破壊が著しかったことが挙げられるのではなかろうか。寺院の建設後、大量の山茶碗の出土・中世溝の検出に代表される中世の地形改変・近世の耕作・岐阜大学建設時の整地・撤去時の掘削等で相当攪乱を受けたことが窺える。なお、中世に開削されたと思われる溝については、埋土中から出土した山茶碗から、その下限を12世紀後葉から13世紀後葉に設定できると考えられる。

次に、望外の成果であったのが、弥生時代末～古墳時代初頭および中世の遺構・遺物の検出である。弥生時代末～古墳時代初頭の土器については、既に表面採集によってその存在が知られていたが、まとまった量が出土することは、住居跡の検出と共に予想し得なかったことであった。パレススタイル壺・S字甕・高坏・器台・蓋・小型丸底壺等が出土したが、最も多く出土

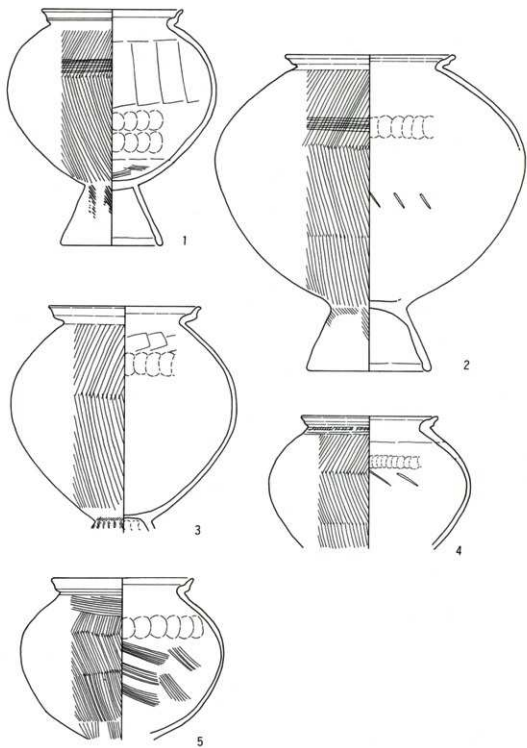
したS字澗口縁部の形状から考えると、古墳時代初頭の、いわゆる元屋敷期に属するものが大半であるが、この時期より遡るものも少量出土している。城之内遺跡は、少なくとも弥生時代末にはじまり、古墳時代前半にいたるまで小規模ながら存続していたことが推定できる。ただし、大溝等の検出は、今後の調査でのある程度の規模の集落跡の存在の可能性を予想させるものと言ってもよからう。

中世の遺構・遺物については、表面採集によりある程度その存在が推定できたが、井戸の検出は近くに居住の場があったことを物語るものであろう。直角に区画された溝の内部に屋敷跡等が遺存する可能性もあり、次回調査に期待したい。井戸底から出土した天目茶碗は大窯Ⅰ期ないしはブレ大窯期に属するもので、茶碗の出土状態から考えて、井戸の築造年代もこの時期に近いと考えられる。またその他の遺物で、特に山茶碗については他地域での編年研究の成果から、おおむね12世紀後葉から13世紀後葉という年代を設定できる。また他の遺物については、12世紀後葉以降のものが断片的にみられ、断続的な営みがこの地であったことが窺える。長良川北岸のこの地周辺を土岐氏の枝広館に比定する考えがあることは先に述べたが、今回の調査で知り得たことが直接的な証拠とはならないものの、その可能性はある程度高まったと言えよう。

層位的な捉え方がほとんど出来なかったが、遺物そのものについてはかなりの量が出土し、これらにより遺跡の営まれた年代等もある程度おさえることが出来た。考古学的な調査が、古墳の発掘調査以外それほど行われておらず、あまり明かでなかったこの長良地区の歴史の解明に、今回の発掘調査の資料が貢献できることを願って結語としたい。

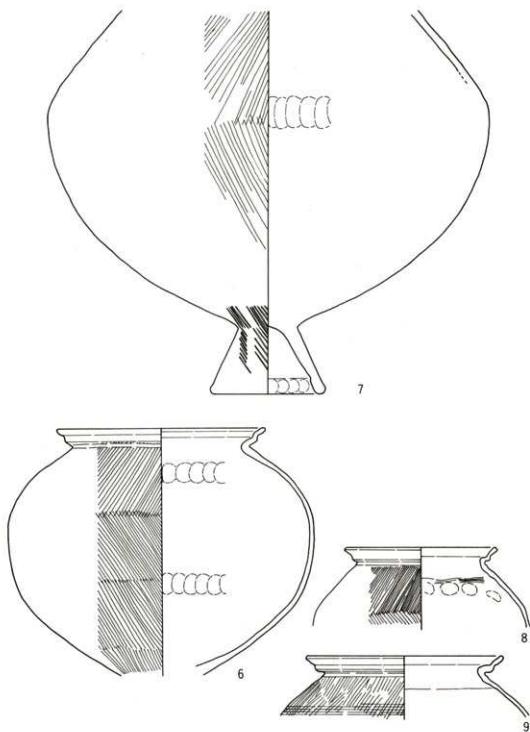
最後に、この調査の実施にあたっては多くの機関・個人の方々より多大なるご指導・ご援助を頂きましたことを記し、謝す次第です。

註 28 前掲註1に同じ



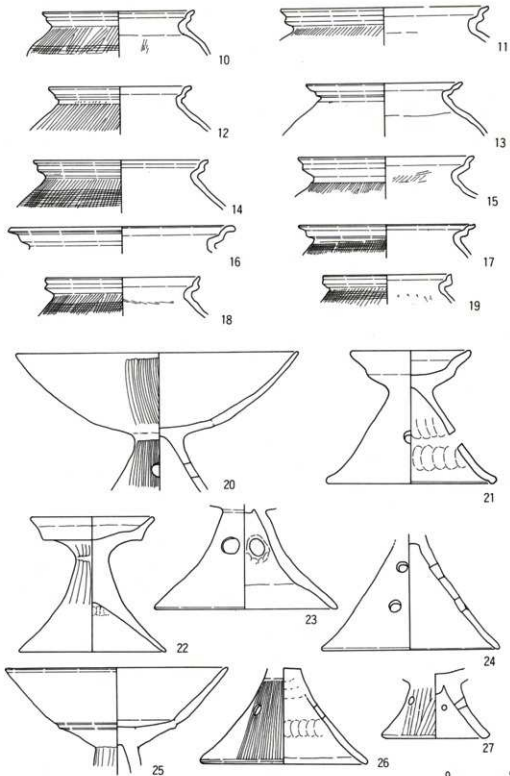
第1圖 出土遺物実測図 S字状口縁台付甕



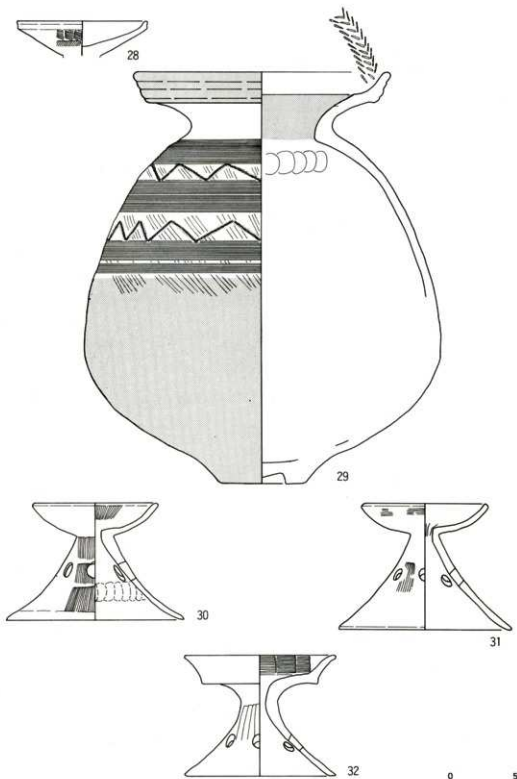


第2図 出土遺物実測図 S字状口縁台付甕

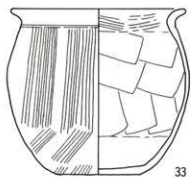
0 5



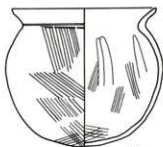
第3圖 出土遺物実測図 S字状口縁台付甕・高坏



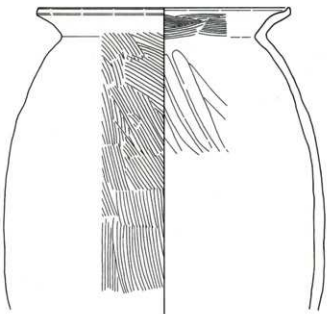
第4図 出土遺物実測図 高坏・パレススタイル壺・器台



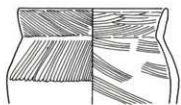
33



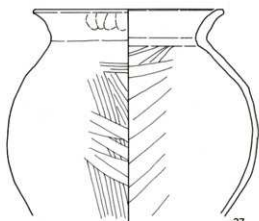
34



35



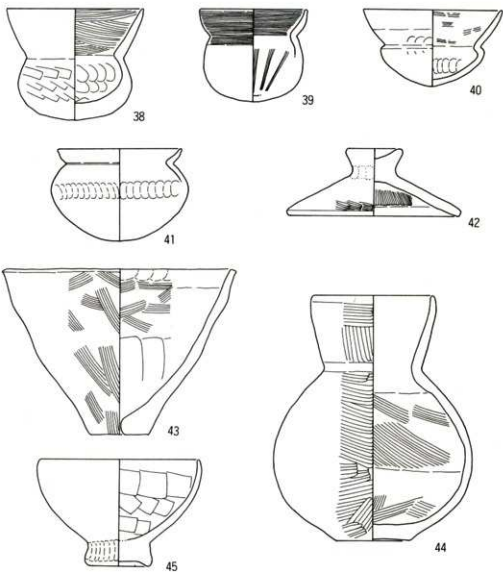
36



37

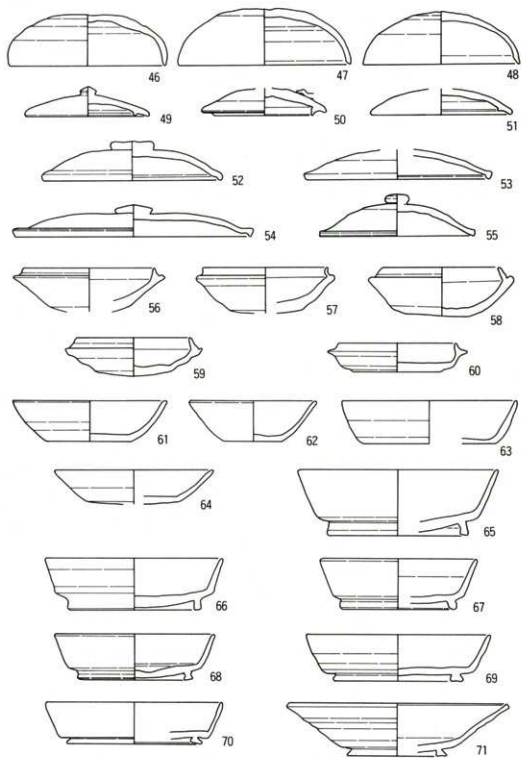
第5図 出土遺物実測図 甕



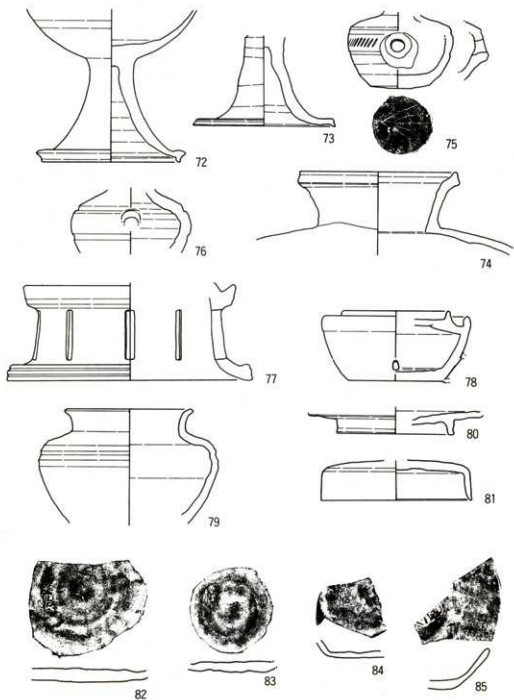


第6図 出土遺物実測図 小形丸底壺他



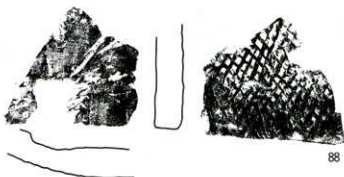
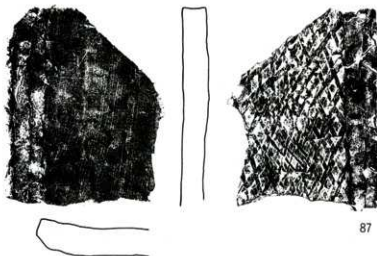
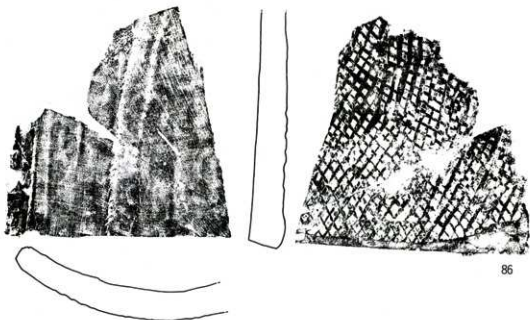


第7图 出土遗物实测图 须惠器(坏盖·坏身)



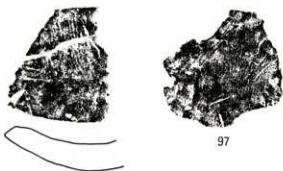
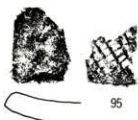
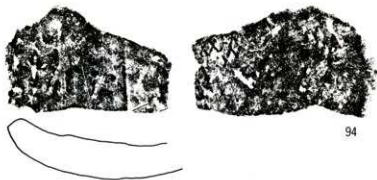
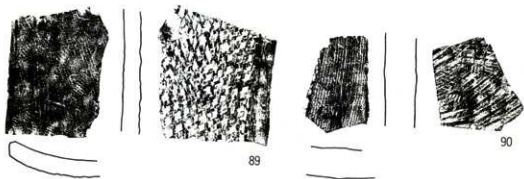
第8圖 出土遺物実測圖 須惠器(高坏他・刻印須惠器)





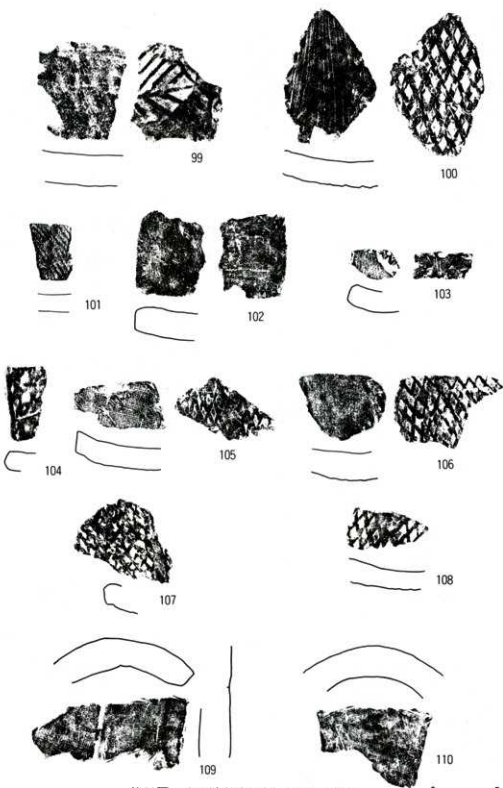
0 5

第9圖 出土遺物実測圖 平瓦



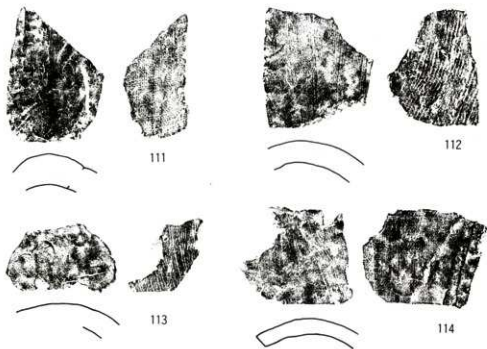
第10圖 出土遺物実測圖 平瓦





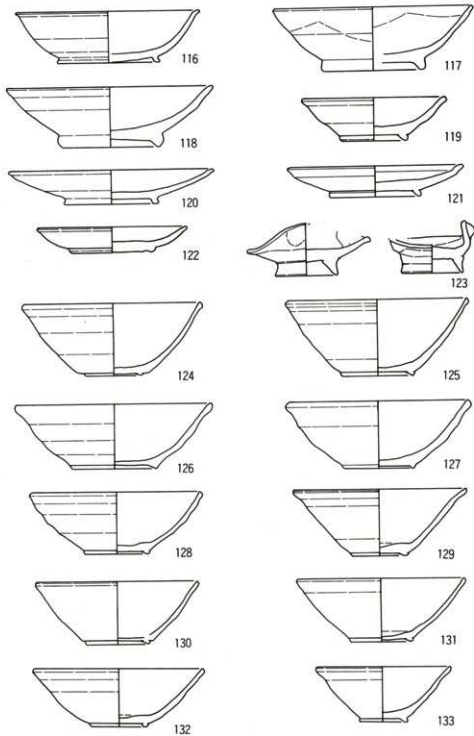
第11圖 出土遺物実測圖 平瓦・丸瓦

0 5



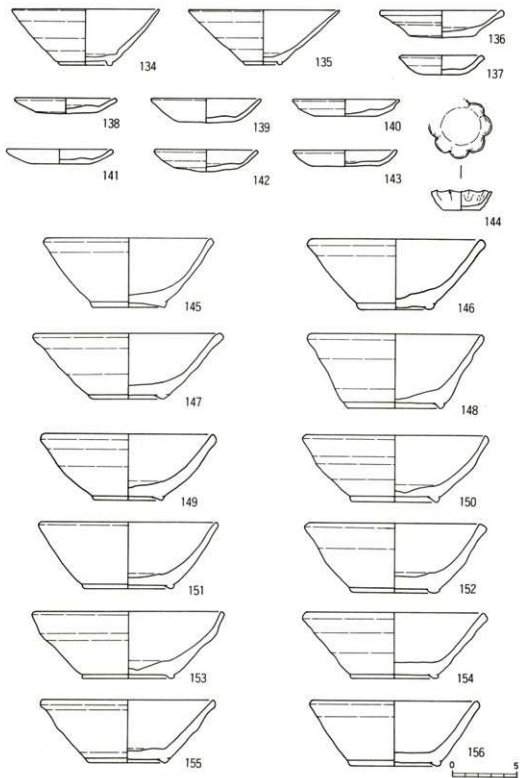
第12図 出土遺物実測図 丸瓦



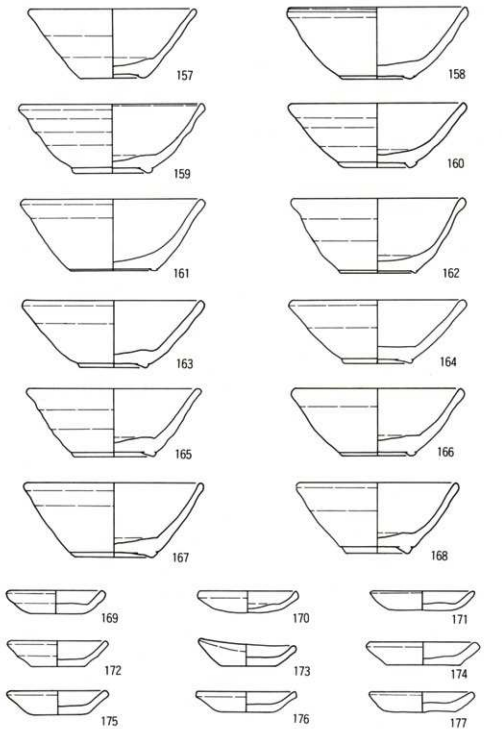


第13図 出土遺物実測図 灰釉陶器・均質手山茶碗



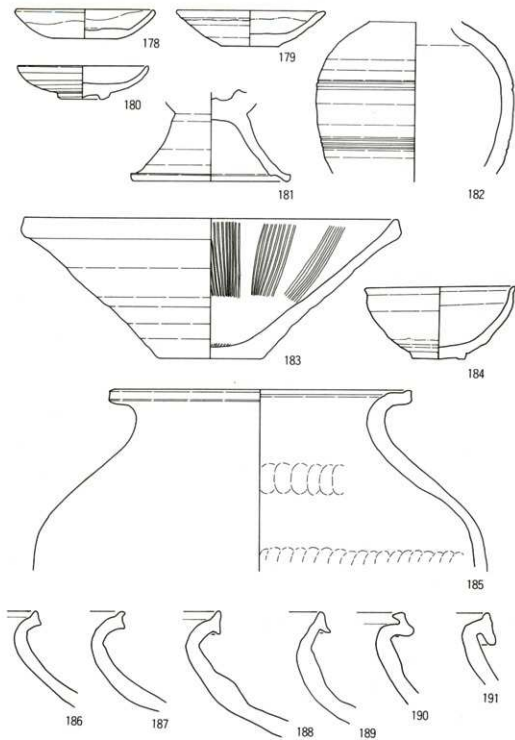


第14図 出土遺物実測図 均質手・荒肌手山茶碗



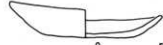
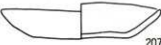
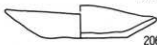
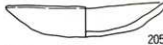
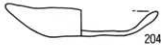
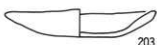
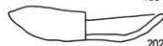
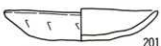
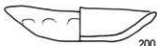
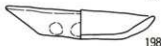
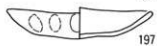
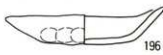
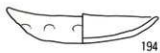
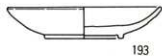
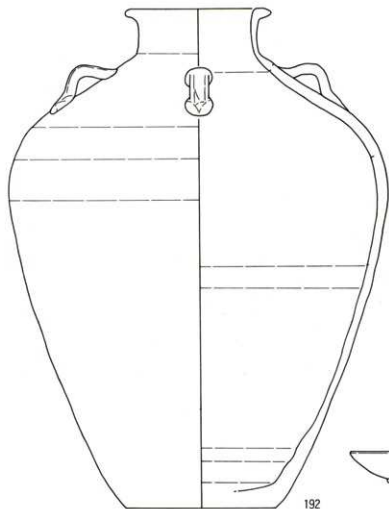
第15图 出土遺物実測図 荒肌手山茶碗





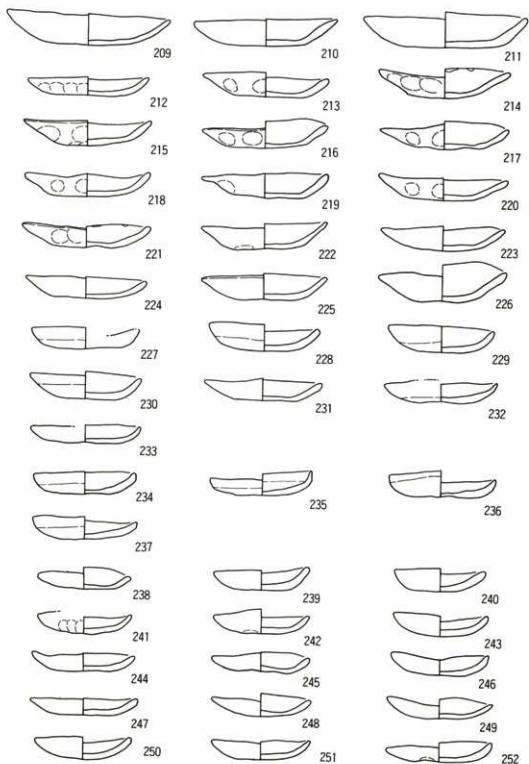
第16图 出土遺物実測図 中世陶器類





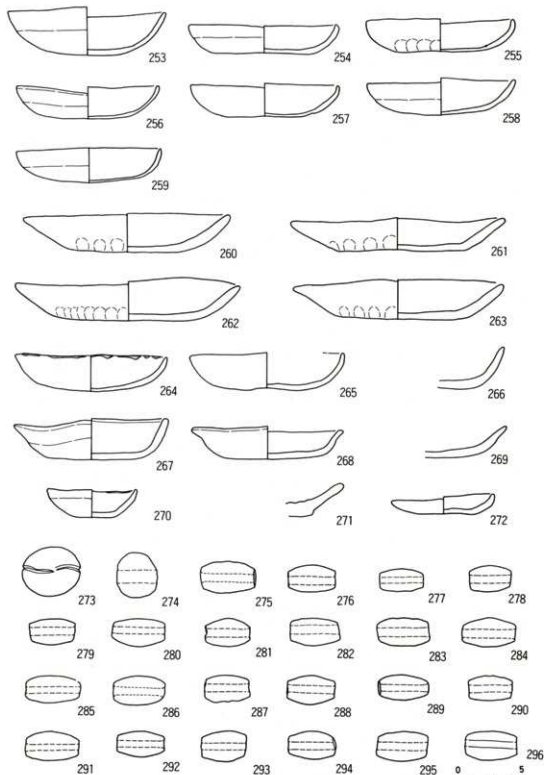
第17图 出土遺物実測図 中世陶器類・土師皿



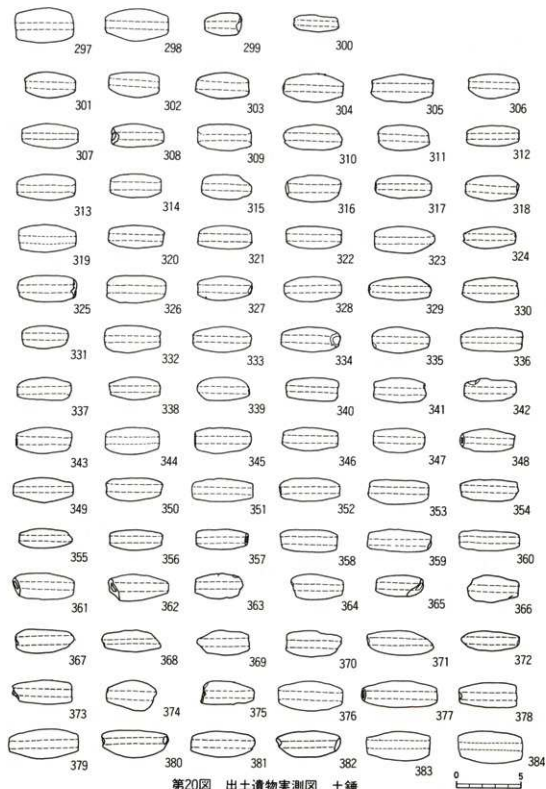


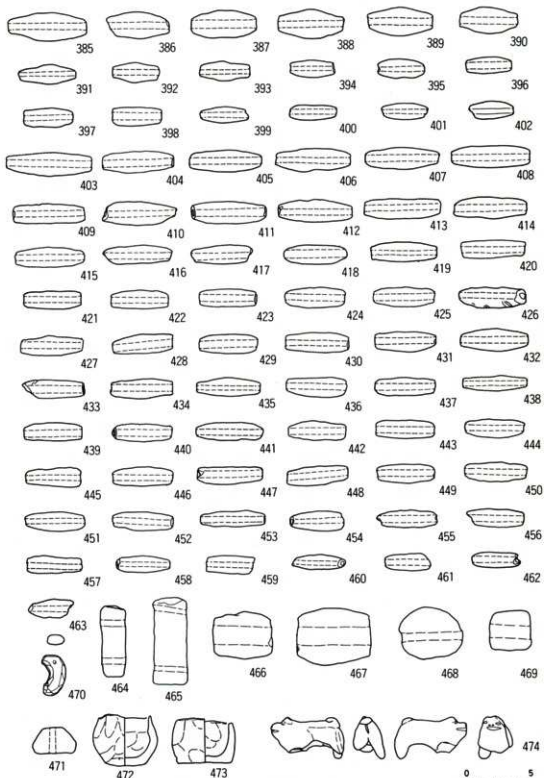
第18図 出土遺物実測図 土師皿





第19図 出土遺物実測図 土師皿・石錘・土錘



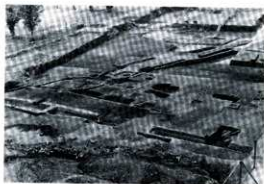


第21図 出土遺物実測図 土錘・その他

圖 版



a 発掘調査前全景（北西より）



b 遺構検出状況



c 住居跡検出状況



d 大溝完掘状況（東より）



e 大溝完掘状況（西より）



f SDOI完掘状況（東より）



g SDOI完掘状況



h SDOI北東端埋土堆積状況



i 井戸跡検出状況



k 井戸底完掘状況



l SDO2・SDO3 完掘状況



n 土師皿出土状況



j 井戸側たちわり



m 器台出土状況



o 大溝掘削状況



S字状口縁台付壺 (1)



同 (2)



同 (3)



同 (4)



S字状口縁台付壺 (5)



同 (6)



同 (7)



同口縁部片 (8-19)



土師器 高坏(20-28)



土師器 高坏(20)



土師器 高坏(21)



土師器 高坏(22)



同 (23)



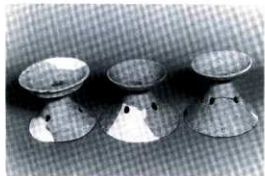
同 (24)



同 (26)



土師器 高坏(27)



土師器 器台



同 (30)



パレススタイル壺 (29)



同 (31)



土師器 高坏(32)



土師器 甕(33)



土師器 甕(34)



土師器 甕(35)



土師器 小形丸底壺(38)



同 (39)



同 (40)



同 (41)



土師器 ふた(42)



土師器(43)



土師器 瓢形壺(44)



土師器 鉢(45)



須恵器 坏蓋(46)



同 (47)



同 (48)



同 (49)



須恵器 坏蓋(50)



同 (51)



同 (52)



須恵器 坏身(56)



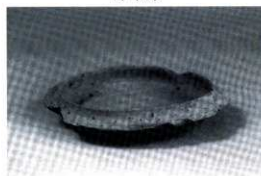
同 (57)



同 (58)



同 (59)



同 (60)



須惠器 坏身(60)



同 (61)



同 (64)



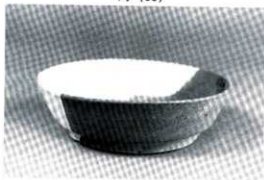
同 (65)



同 (66)



同 (67)



同 (68)



同 (69)



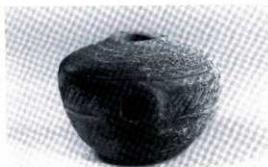
須惠器 高坏(72)



須惠器 高坏(73)



須惠器 横瓶(74)



須惠器 甌(75)



須惠器 甌(77)



須惠器 甌(78)



美濃国刻印須惠器(82)



同 拡大 (82)



同 (83)



同 拡大 (83)



同 (84)



同 (85)



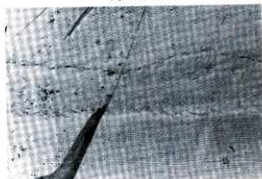
平瓦 (86) 凸面



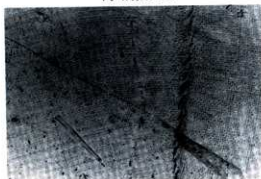
同 凹面



同 隅放大图



同 凹面放大图



同 凹面放大图



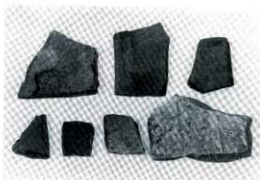
平瓦 (87) 凸面



同 凹面



平瓦 (88~94) 凸面



平瓦 (88~94) 凹面



平瓦 (95~100) 凸面



平瓦 (95~100) 凹面



平瓦 (101~108) 凸面



平瓦 (101~108) 凹面



丸瓦 (109~114) 凸面



丸瓦 (109~114) 凹面



灰釉陶器 (116~123)



灰釉 碗 (116)



灰釉 碗 (117)



灰釉 碗 (118)



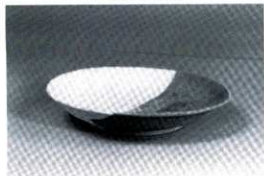
灰釉 小碗 (119)



灰釉 皿 (120)



灰釉 皿 (121)



灰釉 皿 (122)



灰釉 耳皿 (123)



均質手山茶碗 (124)



同左外面底部 (124)



同 (125)



同左外面底部 (125)



同 (126)



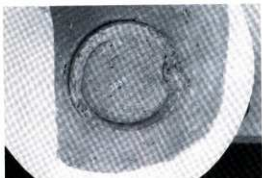
同 (127)



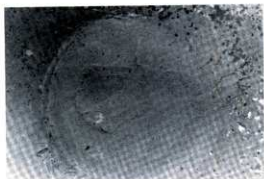
同外面底部 (127)



同 (128)



均質手山茶碗 (128) 外面底部



同左 (128) 内面底部



同 小碗 (133)



同 皿 (136)



同 皿 (137)



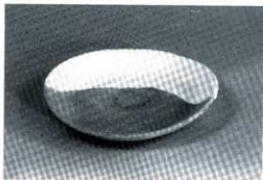
同 皿 (140)



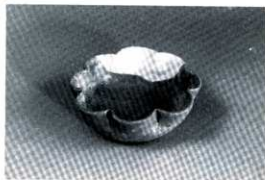
同 皿 (141)



同 皿 (142)



均質手皿 (143)



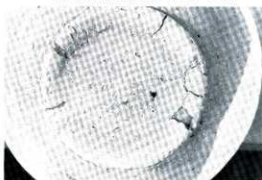
均質手入子 (144)



荒肌手山茶碗 I 類 (145~148)



同 (145)



同 (145) 外面底部



同 (147)



同 (147) 外面底部



同 (148)



荒肌手山茶碗 I 類 (148) 内面



同左 (148) 外面底部



同 II 類 (149~153)



同 (149)



同 (150)



同 (150) 外面底部



同 (151)



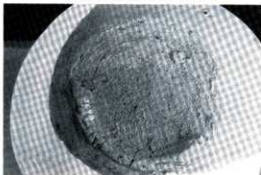
同 (151) 外面底部



荒肌手山茶碗Ⅱ類 (153)



荒肌手山茶碗Ⅲ類 (155)



同 (156) 外面底部



同 (157)



同 (161) 外面底部



同 (164)



同 (164) 内面底部



同 (165)



荒肌手 皿 (169)



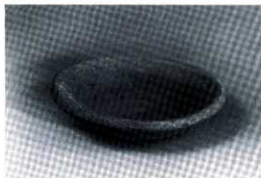
同 (170)



同 (171)



同 (173)



同 (175)



同 (176)



古瀬戸系施釉陶器 (179)



摺鉢 (183)



天目茶碗 (184)



四耳壺 (192)



常滑大甕口縁部片 (186-191)



土師皿Ⅰ類



同 左



同 (201) 内面



土師皿Ⅱ類



土師皿V類



同 (248)



土師皿VI類 (256)



土師皿VII類 (260~262)



同 (262) 内面



土師皿VIII類



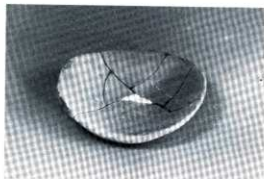
同 (264)



同 (265)



土師皿Ⅱ類 (214)



同 (222)



土師皿Ⅲ類 (227~233)



同 (229)



同 (230) 内面ナデ



土師皿Ⅳ類 (234~237)



同 (235)



土師皿Ⅴ類



土師皿Ⅷ類 (267)



同 (267) 外面横ナデ



同 (272)



石錘 (273)



土錘Ⅱ-2類



土錘Ⅱ-3類



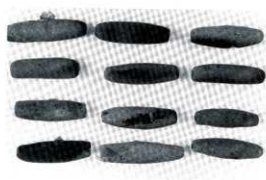
土錘Ⅱ-3類



土錘Ⅱ-3類



土鍾II-4類



土鍾II-4類



土鍾III類



土鍾(I・II-1・III・IV類)



滑石製勾玉(470)



手づくね土器(472)



犬(?)形土製品(474)

城之内遺跡 埋藏文化財
発掘調査報告書

平成元年3月 発行

発行 岐阜県教育委員会
〒500 岐阜県岐阜市葦田1-1
印刷 株式会社 大洋社
〒501-04 岐阜県本巣郡北方町
